

気高く生きる道を選択します

<http://hatagaya-saisei-univ.jp>



幡ヶ谷再生大学

HATAGAYA RE-BIRTH UNIVERSITY

Hatasai Magazine Vol.6

幡ヶ谷再生大学 他学部紹介

私たち、幡ヶ谷再生大学では復興再生部以外にも学部を併設しています。あくまでも自分達以外の人間復興を軸に立ち上げたサークル活動ですので、基本概念に変わりはありません。その中で、私達の意思にご賛同頂いた方々と共にその他サークル活動も共有できたらと思っています。陸上部、及び農学部に関しては頻繁に募集を行っています。詳細はそれぞれのWebやTwitterなどをご確認ください。

幡ヶ谷再生大学復興再生部とは？

2006年に仲間内のサークルとして始まった幡ヶ谷再生大学
陸上部や格闘部など、あくまでも自分達の人間復興として集まって活動していた。

そんな中2011年3月11日に発生した東日本大震災

日本中、世界中に大きな衝撃と悲しい爪跡を残した。

その復興支援を主な目的とし、その他の危機的な災害が起きた際も
支援出来る非営利団体としてこの度新たに復興再生部を開校する。

幡ヶ谷再生大学復興再生部 部長 TOSHI-LOW

VISION (目的)

2011年3月11日に発生した「東日本大震災」
その被害をうけてしまった地域の子供達の未来構築を軸にそれに関わる全ての復興支援を目的とし活動する事。
また、その他予期せぬ危機的事態が発生した際は状況下に応じて対応していく事。

MISSION (使命)

身体的、精神的にも被害をうけてしまった子供達への明るく未来を構築していく事。
単発的なサポートではなく、長期を見越して復興への活動のサポートをしていく事。
幡ヶ谷再生大学の定義に則り、遊び心を忘れずに人間再生と被災地の復興を行っていく事。

CLARITY (明確さ)

当団体の役員は報酬や利益は一切受けず、全てを災害の復興支援に使用する事。
あくまでも直接的に行動する事を前提に行動、リサーチし、他団体、自治体とも連携しあって明確なサポートをしていく事。
活動予定、活動結果を随時報告する事。

特定非営利活動法人 幡ヶ谷再生大学復興再生部 (23生都管特第1204号)

陸上部



https://twitter.com/rebirth_rikujyo

格闘部

東京木曜会
TOKYO THURSDAY JU-JITSU
in alko-holic

山岳部



音楽部



農学部



<https://twitter.com/nougakubu>

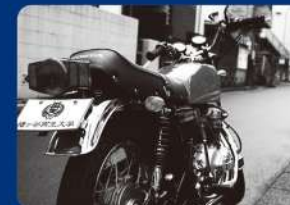
読書部



手芸部



二輪部



映像部



主な活動履歴

2011	03/17~19	および水戸の仲間たちによって北茨城・いわき・高萩へ支援物資の募集と運搬（飲料水は岩手県宮古市へ）
	03/29~04/05	避難所に直接物資を届けている札幌のハードコアバンドSLANG KO氏に託すために子どもたちへのおやつを募集。BRAHMANのメンバーによる岩手県宮古市へ運搬
	05/12~22	「オペレーション米騒動」岩手県・宮城県・福島県への送る支援物資の募集。集まったお米、約10トン
	08/01~13	作戦コード「H2O」福島県南相馬市への支援物資（飲料水・お菓子・米・レトルト食品・保存食品）の募集。集まった飲料水、約25トン。「幅ヶ谷再生大学 南相馬キャンパス」LIVE前に支援物資受け入れ先の南相馬市「きっずくらぶ」へBRAHMANメンバー、スタッフ、茨城県、福島県の仲間により運搬
	11/11	NPO（特定非営利活動）法人 幅ヶ谷再生大学復興再生部（23生都管特第1204号）取得
2012	03/11	幅ヶ谷再生大学 開校
	04/12~05/11	宮城県石巻市小湊浜（牡鹿半島）にてワカメ収穫作業の生徒募集及び派遣
	04/30・06/10	「首長恐竜の親子3体像展示」イベント（6月17日~7月1日）会場になる宮城県石巻市のみなと荘園庭に残る津波漂流物やガラス片撤去と清掃・整地作業
	05/13	竜巻被害にあった茨城県つくば市北条にて瓦礫撤去作業
	06/17~7/01	宮城県石巻市のみなと荘にて「首長恐竜の親子3体像展示」イベント開催
	09/15~16	東北AIR JAM 2012 幅ヶ谷再生大学 復興再生部 ブース初出展
	09/17~11/04	宮城県石巻市「大街道子供広場作り」。全3回
2013	02/07	幅ヶ谷再生大学 読書部として宮城県石巻市立湊小学校にて全学年、1クラスずつ読み聞かせを実施
	02/25	仙台市立蒲町小学校にて、特別講師として「生きる」ということをテーマに授業を開催。未だ仮設の校舎のなか、元気で真摯な子供たちの姿は再生大メンバーにとって非常に勉強になる講義となる
	04/29	宮城県・小湊浜子供広場作りに着手
	07/07	幅ヶ谷再生大学 読書部として穀町幼稚園、ふたば保育園にて読み聞かせを実施
	08/10~11	幅ヶ谷再生大学 復興再生部 SUMMER SONIC 2013 東北復興 PROJECT「音遊海岸」にブース出展





- 12/05 幡ヶ谷再生大学 読書部として石巻市大原小学校全校生徒に読み聞かせ
- 2014** 01/11 小淵浜子供広場完成 (全 13 回)
- 04/29 小淵浜子供広場お披露目会。
地元の大原小の児童らによる獅子振りや空手の演武、ミュージシャンの演奏に合わせた地元の住民による歌などを披露
- 05/21~06/21 BRAHMAN Tour 1080° 幡ヶ谷再生大学復興再生部ブースを全会場に出展
- 08/06~2015/07/05 いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会 1 回~7 回
- 08/16~17 幡ヶ谷再生大学 復興再生部 SUMMER SONIC 2014 東北復興 PROJECT 「音遊海岸」 にブース出展、大阪にも初出展
- 09/09 いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会 (放射線基礎講座 1 回目) 2 回目
- 12/03 津波被害の大きかった開上近くの仙台市東四郎丸小学校 6 年生の授業で「生きる」をテーマに特別講師として参加
- 12/13 いわき・生木葉ファームでの農作業と勉強会 (放射線基礎講座 2 回目) 4 回目
- 2015** 03/11 幡ヶ谷再生大学映像記録「鼎の間」 DVD 発売
- 08/09,09/14,10/25 幡ヶ谷再生大学 公開講座開催 第 1,2,3 回目
- 09/15~2016/09/16 東日本豪雨災害・常総市支援活動第 1 回~第 22 回
大雨被害にあった茨城県常総市にて浸水した民家の泥かきや家具の運び出し等のお手伝い、若宮戸・石塚さん宅作業、浸水した米農家さんと蕎麦屋さんの片付け、近隣のお宅の土壌撤去、お墓の泥出しや掃除、自動車工場やご自宅の泥出しや片付け
- 10/03・04 ブルーベリー農家さんの畑とハウス内泥出し、整地、土壌撤去など
- 11/01 Tシャツプリント工場にて浸水したTシャツの片付け、仕分け、洗濯など (Tシャツ再生大作戦の立ち上げ)
- 2016** 02/13~14 沖縄アサイラム (ブース出展、特別公開講座)
- 02/15 辺野古、じんぶん学校、高江訪問
- 04/20 幡ヶ谷再生大学 復興再生部 熊本入り
- 05/01 茨城県常総市災害復興支援イベント「Dappe Rock's」にてブース出展
- 05/29 常総若宮戸石塚さん宅作業 FINAL
- 06/02 幡ヶ谷再生大学 熊本キャンパス@熊本 NAVARO
- 06/03 幡ヶ谷再生大学 読書部として熊本県大津町立護川小学校と大津北小学校全校生徒に読み聞かせ
- 06/11~ 熊本地震により南阿蘇、嘉島、熊本市内、益城にて瓦礫片付けお手伝い、瓦のブルーシート掛け、草刈り

東日本豪雨災害・ 常総市支援活動

2015年9月、関東・東北豪雨は各地で甚大な“爪跡”を残しました。茨城県常総市での活動のきっかけ、復興支援場所となった現地の当事者たちに当時と現在、“これから”を話していただきました。

「ゴミ1つ拾うだけでもいいから力になりたい」

2011.3.11から今日まで幡ヶ谷再生大学と行動を共にする須藤さん。2015年9月、関東・東北豪雨が起きるとすぐ常総に駆けつけた。幡ヶ谷再生大学との出会いと今後に期待することを訊きました。

須藤 典保
茨城県出身



——東・東北豪雨による常総での水害が起こったときの心境を教えてください。

常総は自分が仕事の営業でまわっていた地域だけに知り合いも多いし、すぐにつらかった。

すぐに行きたかったけど東日本大震災のときのよりは、被害の範囲が局所なために自分の仕事にも支障がなかったの、すぐに手伝いに行けないことが悔しかったのを覚えている。

——当時、常総でお店を構える和菓子屋「ゆたかや」で働い

ていた古くからの友人であり、今回の冊子でもインタビューさせていただいている菊池貴司さんに連絡をしたときの心境を教えてください。

たまたまその週末に群馬の水上高原でおこなわれている「New Acoustic Camp (OVERGROUND ACOUSTIC UNDERGROUNDがオーガナイザーを務める音楽フェス)」の撤収作業があったんだけど「地元に住ないとダメだと思って、現場を指揮するKEICRAFTという会社の島崎さんにお願いして、休ませてもらった。

そして、週末の土曜に玄関の外に産り込んで「何ができるか」を考えていたとき、しばらく会ってなかったタカシ(菊池貴司)のことを思い出した。

常総の有名な団子屋に勤めているのを思い出して、「店は大丈夫なのか」と心配だった。きっと水害の影響で彼の元に電話も集中しているはずだから「いま電話をしたら迷惑かな」と思いながらも電話した。

「ゴミ1つ拾うだけでもいいから力になりたい」って本当に思ったよ。

俺らでできることは全力でやりたい、と思っていたからプロ用のデカイ高圧洗浄機もトラックで持って行って、一日中「ゆたかや」の駐車場を洗浄していた。

——菊池さんとは旧知の仲だったのですか？

タカシとは幼稚園が一緒で、小学校からはお互い別でしたが、同じ道場で剣道をやっていたからずっと知っていた。その後もときどき会う仲だった。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2009年？ いや10年かな？ 学長 (TOSHI-LOW) を含め、茨城の先輩たちがランニングアプリ「NIKE+」で走った距離を競い合っていて、気になって聞いてみたら、普段、まったく走りそうもないような先輩たちが頑張っている姿に共感して走り始めたのが最初。

今は「幡ヶ谷再生大学陸上部」って名前になっている (笑)。2011年1月にみんなで初めてフルマラソンに出場した矢先の3月、東日本大震災が起こった。

俺の住んでいる地域も被害はあったけど、東北沿岸地域に比べたら被害がなかったに等しかった。

茨城には荷物が届かなかったから、仕事も制限があって早く終わった。仕事から帰ってニュースばかり見ていた。で、5日ぐらい経った夜かな？ 深夜まで酒飲みながらニュース見ていたら、何もできない自分が悔しくて、なぜかいつも連絡取らない「陸上部」(現・幡ヶ谷再生大学陸上部) の先輩に連絡して「何かやりましょうよ！」みたいなメールしていた。

次の日の朝に先輩から「俺も同じこと考えていた！」ってメールが来て、その日のうちだったかな？ 内郷げんこつ会のヒデキさん (冊子Vol.4に登場) に連絡して、その日に集めた水や食料などを運んだのが最初だった。

当時は「幡ヶ谷再生大学」って名前じゃなかった。

——その当時は、ほかの名前はあったんですか？

なかったと思うよ (笑)。でも、このとき一緒に動いていたメンバーは、今でも変わっていない。

——「陸上部」からはじまり、物資支援、そして現在の幡ヶ谷再生大学での全活動を通じ、印象に残っている生徒はいましたか？

現場でいろんな方と会話はするけど、名前を聞いて後日連絡取り合うような人はなかなかいない。その中でも、東北にいるシンジ (浅野真司) かな、やっぱり。

最初に出場したフルマラソンのときにも会っていたはずだけど、あまり話はなくて。その後連絡が来たのは、学長たちがお餅を集めて東北に配った時期かな。俺が宮城担当になって、そのときシンジは広島で結婚式だったのにもかかわらず、朝早く新幹線で幡ヶ谷まで来て、餅を積んだトラックに乗って深夜まで配るのを手伝ってくれた。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

その活動一回だけならそんな印象に残らなかったのかもしれないけど、個人的なボランティアで南三陸町に行ったときやつくばの竜巻被害、常総の水害のときもシンジは駆けつけてくれた。

南三陸町のボランティアの仲間とも仲良くやってくれていたし、頼りになる後輩かな。たまに先輩と混ざって悪ノリするときは腹立つけどね (笑)

——幡ヶ谷再生大学の活動を通して嫌な経験がありましたら教えてください。

つらい経験はあったけど、嫌な経験はないかな。ボランティアって「お節介をしに行く」と俺は思っているから、現地の方の気に触ることがあれば、ボランティアに行った自分たちが悪い。

自分を責めて自己完結できれば、いろんな弊害はなくなると思う。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

とくをお願いしたいことはないですよ。強い言うならば災害現場の活動のときに、適材適所な人材を必要とする場合の募集には、資格や得意分野なども記載して募集していただけると、作業もしやすいかと思います。

熊本に行った際、重機を操れる人と重機がほしかったので、募集の際に手を上げてくれる人がいると助かるかなと思いました。——幡ヶ谷再生大学は、「ゆたかや」さん、ブルーベリー畑、若宮戸 (活動に入った常総市の地名)、Tシャツ工場と常総でさまざまな活動をおこなっていました。何か感じることはありませんか？

すべての現場において、幡ヶ谷再生大学のゆかりさんが毎回地元の方のニーズを拾っていたいていただいているおかげで、ボランティアの“押し付け”的なこともなく、地元の方との関係も良いので、その点に関してはとても良いことだと思います。

俺も、Tシャツ工場のオーナー・長野さんとは飲みに行ったくらい仲良くなった (笑)。

地元の方々の顔って、いつまでも忘れられない。再会できるとうれしいし。

熊本で畑の解体をやったときには、帰りに「風呂入って行け」と何度も言っていたけど、遠慮なく入らせていただいて「今度来たら辛子レンコン作って待っているから、また必ず来てね」と言われて。あれは本当にうれしかった。

「ありがとう」と言われるうれしさより人と繋がるほうが、俺はうれしい。

——幡ヶ谷再生大学の活動を通じ、苦しかったことを聞かせてください。

一般の人たちが来るようになってからは、体力的に苦しいことはなかったんだけど、あるとしたら2011年に水や米を運んだときかな…。

水を運んだときは、幡ヶ谷から茨城へ戻る途中に、トラックのタイヤがパンクしてしまって、高速道路のバトロールの車に無理やり高速を降ろされた。

タイヤを交換しようにもナットが固くて外れなくて立往生したのはつらかった…。

ようやく交換して家に帰って、それからすぐに福島に向かい、ほとんど寝ないで荷下ろし…。そのあとBRAHMANのLIVEを見ながら、立ったまま寝たのは、あとにも先にもあの日だけ (笑)。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

この団体？ 集団？ がなかったら、フルマラソンに挑戦したり、九州で活動したりすることは、きっとなかったと思います。

人生を変えてくれた場所だと思い、感謝しています。先輩たちの御指導がたまに厳しいときもありますが、つらいときがあってこそ記憶に残るものだと思っているので、素直に受け止められます。

大学という名前が付くだけあって、自分を成長させてくれる貴重な場所だと感じているし、信じています。

「還暦をすぎて人生観が変わりました」

2015年9月に発生した関東・東北豪雨の水害により、十数年もの歳月、手塩にかけたブルーベリー園は壊滅状態に陥ってしまう。
幅ヶ谷再生大学がボランティアに入ったブルーベリー農家を営む稲葉家にとって、幅ヶ谷再生大学とは…。率直な気持ちを訊きました。



——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

水害後、支援のため声をかけていただき、そのときに知りました。

——2015年9月、降り続く雨をどう思いましたか？その後は想像できましたか？

栃木県でずっと降り続いている地帯があることは気になっていましたが、当地域では記録的な大雨というほどでもなく、さほど心配をしていませんでした。

したがって、まさか間近で堤防が決壊するとはまったく想像できませんでした。

——作業に集まった幅ヶ谷再生大学の生徒たちを見て感じたことをお聞かせください。

年齢層の幅が広い生徒たちがいるので、先生もいるのかと思いました（笑）。

いづれにしても、体力的にも精神的にもとても頼もしく感じられました。

——今回の冊子で「いつもの生活が一瞬でなくなっちゃうんだ」と話す生徒もいました。そのときの感慨をお聞かせください。

水が来はじめてもの数十分で、住まいも車もダメになった。屋根で救助ヘリを待っているとき、車は悲鳴をあげていた。電気ショートによる誤動作。数分先のことが予想つかないまま、二階へ、屋根へと追いやられた。先がわからない恐怖。ヘリに救助されたときに初めて「助かった」と安堵した。

それも一晩の束の間。

翌日には母屋、納屋、宅地内は泥まみれの変り果てた姿だった。ブルーベリー園はネット設備が倒壊、樹は流失、損傷で壊滅的被害。

信じられない光景だった。

——「もう一度やり直したい」というお話もありました。それは現在でも変わりませんか？

はい。

——うれしかった想いがあればお聞かせください。

ブルーベリー園の倒壊したネット設備の解体については、当初は途方に暮れていました。9月23日以後、ネット設備の片付けをはじめたものの、重機でも人手でもなかなかかどりませ

んでした。

多数の知人、友人に手伝ってもらい、大幅に進展したものの、何回も頼めない。社協（社会福祉協議会）のボランティアは「住まい」しか対応してくれない。そういった状況のなかで幅ヶ谷再生大学さんに片付け作業をしてもらえたことは、水害に関係した出来事のなかで最もうれしかった出来事でした。深く感謝しております。

被災後の生活でうれしかったことは、被災して困窮してときにボランティアさんなどの支援の手が、長期にわたり差し伸べられたことです。

家の泥だし、泥にまみれた物品の区分・廃棄、支援物資の提供、お菓子の配布、震災の被災地などの遠地からの炊き出し、浄化槽の点検などなど、いろいろな形の支援がなされました。ありがたくて涙が出た。何度も。

それまで、人は働いて収入を得て、その収入で生計を営むことが普通で「他人のために働くわけではない」と思っていました。還暦をすぎて人生観が変わりました。

こんなに他人が助けてくれると考えてもいませんでした。人の支え合いの重要性和、尊さを実感しました。水害で失ったものは数知れませんが、このように貴重な経験を得ることができました。

——逆に、悲しかったことがあればお聞かせください。

私のセカンドライフは、まったく狂ってしまいました。十数年かけて育ててきた樹の大半を失いました。その時間は取り戻せない。

——幅ヶ谷再生大学に対する想いがあればお聞かせください。

ボランティアに来ていただいた当日は、本当に「大学」だと思っていました。でも、話を聞くとそうではない、と。

私たちのブルーベリー園の水害後の再生において「幅ヶ谷再生大学」は命の恩人の一人だと思っています。あくる2016年1月のブルーベリー園へのチップ搬入も、その支援がなかったなら、さぞ困難な作業が続いていたと思います。

——今後、幅ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今後も災害時の支援において、ほかのボランティア団体が目につけないところ、手を出さないことなど、被災者の気持ちを汲んで活動していただきたい。

——読者に一言お願い致します。

この水害でボランティアさんの高貴な志に接し、そんな生き方もあるということと、現役世代をすぎて初めて知りました。幅ヶ谷再生大学のみなさまには、私たちにとってかけがえのない支援をいただき、感謝に絶えません。

稲葉政恵
茨城県出身

「このまま笑顔の数を増やしてってください」

災害が起こったとき、旧友でもあり、幅ヶ谷再生大学の生徒の須藤典保さんから連絡を受け、幅ヶ谷再生大学との付き合いが始まった菊池さん。ご自身が働いていた和菓子屋「ゆたかや」も被災し、被災者として活動に従事した経験は、その後どのように活かされたのだろうか。

菊池貴司
茨城県出身



——水害が起こったときの心境を教えてください。

どこから手をつけていいかわからなかったです。店内はめちゃめちゃで、絶句の一言でした。

——幅ヶ谷再生大学の生徒でもある須藤典保さんから連絡があったときの心境を教えてください。

とりえず人手がほしかったので、すごうれしかったです。——須藤さんとは、旧知の仲だったのですか？

はい。幼少のころから剣道をやっておりまして、同期でした。でも、平日頃から連絡を取り合うと仲ではなかったです。それでも災害が起こると、すぐに連絡をくれました。

——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

須藤さんから「人を集められるけど、なにか手伝えることない？」と連絡が来ました。それで来てくれたのが幅再のみなさんです。

——印象に残っている生徒はいましたか？

内藤武敏（笠間コブラ会）さんですね。

農家さんの米を片付けているときに、BRAHMANのTOSHILOWさんが落ちていたギターを弾き始めて。それに合わせて歌い出した内藤さんの歌声が疲れ切っていた自分の気持ちを、スーッと和ませてくれました。

ほんの2〜3分でしたが、聞き入ってしまいました。初めて音楽で感動しました。今でもあのときのことは、心に残っています。

——幅ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

感謝しかありません。自分を成長させてくれたと思います。

——今後、幅ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせく

ださい。

SNSなど今でも拝見していますが、災害があったところには必ず幅再さんがいる！そして、私のように災害に遭われた方たちを笑顔にしていますよね？

このまま笑顔の数を増やしてってください。

——幅ヶ谷再生大学は、和菓子屋「ゆたかや」さん、ブルーベリー畑、若宮戸（幅ヶ谷再生大学が活動に入った常総市の地名）、Tシャツ工場と、常総でさまざまな活動をおこないました。何か感じるものがあればお願いします。

私は、Tシャツ工場とブルーベリー畑で、少しですがお手伝いさせていただきました。それをやりつつ、若宮戸も…。「スゴい」の一言です。現在は、熊本ですよ？正直、「また違うところで活動するの!？」と、驚くばかりでした。

——読者に一言お願いします。

幅再さんには、感謝の言葉しかありません。今回の災害でいろいろな経験をしましたが、「人の輪」のすごさをみせてもらった気がしています。

私も今年新たな区切りとして独立し、和菓子屋を構えました。今回感じた人との繋がり、人の強さ、人の力を信じ、人を大切に頑張りたいと思います。

今回のような災害は二度と経験したくはありませんが、幅再さんの動向を気にしつつ、微力ですが何か力になれば、考えています。

本当にありがとうございました。



菊池さんは2016年5月に和菓子屋「ゆたかや」を辞職し、独立。2016年6月に「和菓子蔵 米あん」を開店。現在は、店主として店頭に立っている。

「和菓子蔵 米あん」

〒304-0068

茨城県下妻市下妻丁383-1

0296-48-6177

「他家でなく当家が『幡再』と関わられて…」

石塚政弘
茨城県出身

常総市若宮戸での活動でお邪魔した石塚家。水害により家を囲んでいた石壁が倒壊し、時代を逆行する土塀にした経緯と幡ヶ谷再生大学との出会い、ボランティアとして参加した『Dappe Rock's』の感慨を話していただきました。



——2015年9月、水害が起こったときの心境を教えてください。

水害の1年半前、河川敷の山が削られたことによって被害が肥大化したことが何より悔しかったですね。

その後、地域として行政に何度も話をしたが取り上げてくれませんでした。

「まさかこんな理不尽があるとは…」と信じられない気持ちでいました。

——どのような経緯で幡ヶ谷再生大学が作業に入るようになったのでしょうか？

幡再さんが私の地元で堆積した砂の土のう詰めの復旧の手伝いをしてくださいました。しかし、手伝いに入った家の方が不在だったり、「一緒に復旧復興しよう」という気構えが感じられないという話を聞き、私も地元に住む1人として憤りを感じていました。

そんなとき、捨てるべき土のうを当家に運んでもらったのがきっかけだったと思います。その際に当家の復旧復興プランを幡ヶ谷再生大学のゆかりさんと須藤典保くんに話させていただきました。

幡再側としても作業とは別に、継続的に「語り」を聞かせてほしいとの意向があり、私自身も「水害語り」をしたかったので、願ったり叶ったりでした。

——「語り」では具体的にどのようなことを話されたのでしょうか。

水害当日だけでなく、当地域の成り立ち、生い立ちや歴史などを通じて被害が拡大してしまった原因や背景。当時の状況、災害の復旧状況、復興プランなどを説明させていただきました。

どの日も、私の「水害語り」を真剣に聞いていただき、うれしかったですね。

——若宮戸の活動では、どのような作業をされたのでしょうか。

メインとしては「土塀造り」です。それに伴う土の運搬や土のうの作成。重機を持ってきたいただいた方もいました。内藤武敏くん（空同クラブ会／幡ヶ谷再生大学）には、石柱の復旧をしてもらうなど技術的アドバイスもいただきました。

——家を囲むように土塀を築かれた経緯を教えてください。

私は「都市計画」を生業としている一方で「土木屋」でもあります。それまで、家の取り囲んでいた「大谷石塀」が水害でことごとく倒れてしまいました。2011.3.11でもビクともしなかった石塀が、です。

修復するには莫大な費用がかかります。当家には石塀以外に約30メートルの土塀が当家屋敷の周りにありました。高さは1m程度です。その土塀の上にツツジ等を植えて天然の塀がわりにしていました。

もちろん今回の水害では、あつけないほどこの土塀も越えられ

ました。しかし、石塀は倒されたのですが、土塀は「えぐられ」はしたものの全壊はしませんでした。そのお陰で「門」と「長屋」などは助かったと思います。

自然には自然に近いものが強いと実感し、逆に構造物は弱いと思いました。水を完全に「シャットアウト」することは困難だと思います…が勢いを殺すことは可能です！それがとても大事だと思っています。

私は「マイナスからプラス」を生むという言葉が好きです。言葉だけでなくそんな生き方も好きです。その点、幡再は生き方のセンスが良いと思いますね。

土塀は今でも「ING」で進めています。

——その際、嬉しかった想いがあればお聞かせください。

幡再の人は、みんないい子で、元気で明るい！そして素直で一緒にいて元気がなれる！そんな人たちと当家で一緒にする食事はおいしくて、楽しかったです。友人も一緒にしたときが何度かありましたが、みんな同じ気分だったと思います。

——幡ヶ谷再生大学の活動を通して嫌な経験がありましたら教えてください。

幡再の方たちとの中では嫌なことはありませんでしたね。楽しかったことや感謝していることばかりです。

——「Dappe Rock's」にボランティアとして参加されたとき、そのときの感慨を教えてください。

かねてよりボランティアに入っていた幡再の子たちと一緒に「同じ仕事をぜひやりたい」という想いがありました。それが実現できて感無量です。

「Dappe Rock's」のようなイベントを、常総市でおこなえることのうれしさもありました。若い子たちと接することで俺も少し若返った気にもなりましたし、BRAHMANが好きになりました（笑）

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

元気をたくさんいただきました。ありがとうございました、と言いたいです…が、復旧復興はまだまだ途上です。これからも頑張って生きていきます。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

音楽や芸能の力、若い力のすごさを知ることができました。この輪がもっともっと大きくなればいいと思います。

——幡ヶ谷再生大学は、和菓子屋「ゆたかや」さん、ブルーベリー畑、若宮戸、Tシャツ工場と常総でさまざまな活動をおこなっています。何か感じる点があればお願いします。

自分たちは単なる「作業マン」ではない。頑張っている人を助けてい。一緒に頑張りたい。それにより自分の気持ちを高めたい。そんな「幡再のスタイル」がとても気に入っていますし、好きですね。

——石塚さんは、古くから続くお家柄と聞いております。認識されている範囲で結構ですので、家について教えてください。

文書として残る当家の記録は江戸初期以降のもので。判読している範囲で400年ほど前の先祖様までは遡れます。常総のお城「豊田城」があります。その城主「豊田氏」が最もこの地域で早く根付いた場所が「当家」であると伝えられています。

豊田氏初代の菩提を代々当家が守っており、中世の石碑（墓石）が数基当家にあります。今回の水害で一基は倒れてしまいました。現在も複数の団体が文化財調査をおこなっています。

毎回パネル撮影していた「政右衛門」というのが当家の屋号です。長男は今でも「政」の字を受け継いでいます。

——2016年5月の作業最終日「幡再×政右衛門ミッションTHEファイナル」はどんな1日でしたか？

当家にとっては歴史的な一日でした。感動、感激を通り越して「夢のような時間」でした。元気に気丈にしたたかに。そしてたくましく。どうせやるなら面白く楽しく。

「この家にみんな来てくれてありがとう！」と思いました。THEファイナルだけではなく、ロンちゃん（RONZI: BRAHMAN）ラーメンの日や、毎日が楽しかった！本当に元気が出ました！

——若宮戸での作業、「Dappe Rock's」など石塚家のみなさまにとって、賑やかな1年になったと思います。今、振り返るとどのよう

「自分のことを『仲間』と言ってくれたことは大きかった」

長野剛知
東京都出身

茨城県常総市でTシャツ工場を営んでいたが、関東・東北豪雨によりほぼ全壊。工場主として、廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことになった経緯と過程、「自主練」の成り立ちについて話を聞きました。

【Tシャツ再生大作戦】<http://hatagaya-saisei-univ.jp/rebirth/tshirts/>

茨城県常総市でTシャツ工場を営んでいたが、関東・東北豪雨によりほぼ全壊。工場主として、廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことになった経緯と過程、「自主練」の成り立ちについて話を聞きました。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

まず、被災後に友人たちに手伝ってもらっていました。やはり、友人たちにも生活があり、継続が困難になり、個人のボランティアさんたちを紹介され、そのなかの1人から幡再を教えてもらいました。

——あの日、降り続く雨をどう思いましたか？その後は想像できましたか？

常総はそこまで降っている、という印象はなかったですね。決壊の当日に従業員から「家が冠水して車を出せない」と連絡があり、ほかの従業員からも「子供が学校から帰された」と聞き、近所を見回ったときに冠水しはじめていたので、そのときに少し不安がありました。

地元の人からは「鬼怒川は、いつ決壊するか分らないほど危ない」とは聞いていたのでラジオとネットを見まわっていました。自分のところは特に避難の指示もなく、それほど危険を感じていませんでした。

そのあとに買い物に行ったら、みんなが非常食を買っていたので驚きました。夜になると、自分のところにも川の水が来

な1年でしたか？

父母、女房、子供たち、同居していませんが妹、叔父叔母、従兄弟。親族一同「幡再」が大好きです。みな「幡再と知り合えて良かった」と言っています。とくに妹は友達がたくさんできたようで、一緒にフェスやライブに行っているみたいです。

本当に良い出会いだと思っています。当家の畑で、幡再のみんなでなんか作りましょう！そしてまたみんなと逢いたい！Facebookでも繋がっており、みんなの活動も拝見しています。

——読者に一言お願いします。

非日常が日常になって1年3カ月。まだまだ落ち着きませんが、心はずいぶん落ち着いてきました。この災害は巨大なマイナスでしたが、それを凌駕するような素晴らしい出会いをもてたと思っています。

私自身の災害や事故、社会問題…ひいては人生に対する意識も変わってきました。さまざまな人々との出会いが、意識を大きく向上させたものだと思っています。

他家でなく当家が「幡再」と関わられて、みなさんと知り合えて、本当に良かったと思っています。もうすぐ母屋大修繕が完成します。ぜひ遊びに来てください。土塀もまだまだカスタマイズしますので、こちらも見に来てください！



はじめ、家の二階に追いやりられたときに「その後」のことを考えました。

——幡ヶ谷再生大学のブース出展の際、展示写真の中に長野さんのご自宅前の道が水で浸かっているものがありますよね。個人的に「その後」しか知りませんでしたので、あの写真には驚きました。撮影したときの気持ちを教えてください。

写真は、お客さんに状況を説明するため撮りました。

自分自身は目に焼き付くほど見た光景でしたので、寝て起きてからまた考えようと思いました。

——Tシャツ工場から汚泥にまみれた「在庫」を外に出し、「Tシャツの山」を作っていたときの気持ちを教えてください。

「何かに使えるかもしれない」と、無地の物とそれ以外とで分別していました。まずは片付けることしか考えていなかったし、それで良いと思っていました。

——リユースTシャツを思い立ったきっかけを教えてください。

ボランティアの人と、うっすらその話が出ましたが、人に着てもらうことを考えるといろいろと問題ありそうでしたし、自

分では判断できませんでした。

それから、幡ヶ谷再生大学のゆかりさんと副部長の喜多條さんに具体的な話をし、やってみようと思いました。

——ゆかりと喜多條とは、お知り合いだったのですか？

ゆかりさんは知人の紹介ですね。喜多條さんとは、かれこれ20数年前からの知り合いでした。

——その後「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

感謝しかありません。

ただ、モノづくりをずっとやってきた人間としては、引っかかることはあります。イベントなどで多くの人が着てくれているのを見るとうれしいのですが、それとは別の、複雑な思いにかられるときがあります。

——水害から1ヶ月後の2015年10月に自主練が立ち上がりまね。どんな流れで立ち上がったんですか？

「自主練」と最初に聞いたとき、何のことを言っているのか理解してなかった記憶があります（笑）

理解したときに「そこまでやってくれるのか」と思いました。素直にうれしかったです。

幡ヶ谷再生大学生徒の声

STUDENT'S VOICE

ブルーベリー園、若宮戸、Tシャツ工場、自主練、での活動を中心に参加して頂いた生徒たちにインタビューを行いました。災害当時から現在まで、そして期待するものを話していただきました。

「今まで経験したことのないくらい心が痛かった」

2015年9月に東北・関東豪雨が発生した翌月に常総の地で「自主練」の立ち上げに尽力した佐藤さん。幡ヶ谷再生大学との出会い、幡ヶ谷再生大学への感謝、そして今後に期待するものを赤裸々に話していただきました。

佐藤慶
秋田県出身



こちらの考えや思いを理解してもらい、活動してくれること自体がすべてうれしいことですよ、やはり。さまざまな提案してくれる人も、黙々と作業してくれる人も、そのすべてがありがたいです。

——自主練で悲しい思い出があれば教えてください。

遊びに来ているような方が来たときは、切なくなりますね。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いがあればお聞かせください。

自分のことを「仲間」と言ってくれたことは大きかったですね。それによって、考えなくて良いことは考えずに済み、気持ちは軽減され、今日に至ります。

幡ヶ谷再生大学を運営する上で決して「表」に出てこなくとも、影で支えている方がいますよね。僕は、そこにこそ感謝を受けています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあれば、お聞かせください。

現在はまだまだ大きな括りでの期待を考えたり、するときではないと思っています。復旧するまで協力してもらうことがその一つですかね…。目の前にあることが、本当の日常に戻ったときに、いろいろな思いが出てくると思います。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANのDVD『霹靂』で知りました。2011年の『AIR JAM』までほとんどBRAHMANは聴いてなかったです。それから3.11の震災があって、Hi-STANDARDが復活してくれて、でも『AIR JAM』には行けなくて…。

後日、WOWOWで『AIR JAM』がやることになってHi-STANDARD目当てで観ていたら、久しぶりにBRAHMANを見て、なんだかすげー泣けてきちゃって。それから食い入るようにBRAHMANのLIVEに行くようになって、自然と幡再を知るようになりました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

あ然としました。

広大な工場の中でTシャツ工場のオーナー・長野さんが1人で片付けていて…。『やべーな』って。いろんな感情が吹き出してきました。途方にくれるようなTシャツの山を見ても「ゴミ」とは思いませんでした。

“山”は自分の好きなバンドのTシャツばかりで、今まで経験したことのないくらい心が痛かったのを覚えています。

音楽が好きになる人にとって、バンドTシャツにいろんな思い出ができるじゃないですか。「このTシャツ、あのツアーのときに買ったあー」とか、ライブ終わって飲みに行ったら、同じTシャツ着ている人がいて意気投合した、とか。いろんな思い出とか、繋がりを作ってくれるような物だと、俺は思っています。

そんなTシャツが世の中に出ていく前に泥水に浸かっちゃっただけで「もうダメ」みたいになっているのが、すごくショックでした。

——Tシャツ工場のオーナー・長野さんから「自主練を立ち上げた人物」と紹介されました。当初は苦労したとも聞きました。現在、振り返っていかがでしょうか。

自主練を立ち上げたときは「人手が多くなければ、前に進まないな」と思っていました。なので、いろんなボランティア団体さんに「ご協力お願いします」みたいな挨拶をしてまわりました。

『Love Song大作戦（東北の子供たちへの支援を中心に活動するボランティア団体）』が洗濯洗剤を集めてくれました。『Team-K（全国規模で活動するボランティア団体）』が一番近いし、人も集められると思い、お願いしました。

幡再からは、農学部やいわきの自主練チームが来てくれました。嫌な思いや腹が立つことも多々ありましたけど、1年以上経った現在でも続いているのは素直に嬉しいですね。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

リユースTシャツを最初に発売したのは、『東北ジャム2015 in 女川』のときだったと思います。時間できて幡再ブースを見に行ったら完売していて、それを知ったときは、何だか少しホッとしました。

ホッとする部分もあった反面、色落ちの強いTシャツはこのときまだ店頭に出していなかったの、少し不安みたいなのもありましたね。

——ここからが勝負だと。

そうです。そのあとだったと思います。かなりうる覚えですけど、たしかSLANGのTシャツを作るときだったと思うんですけど、「すげー色落ちしているものでもいいから」と仰ってくれて。

それがすごく良い意味で反響あって「それがいい！！」みたいになったんです。

その出来事が“リユースTシャツをみんなが理解してくれている”みたいな感じがしました。色落ちの濃いTシャツは「ひょっとしたら売ることができないんじゃないか？」みたいな不安があったので。

——リユースTシャツを通して、嬉しかった想いがあればお聞かせください。

多くのアーティストさんが賛同してくれたこともうれしかったですし、Tシャツをみんなで振り出して見つけるのも、宝物を振り出すみたいで楽しかった。

水害にあったTシャツって部分的に色落ちし、それが1つ1つ違って。自分好みの色落ちを見つけたらすると、テンション上がっていました。

サイズが合わない「チッ！」って、舌打ちしてました（笑）一番嬉しかったのは「Dappe Rock's」ですね…。

老若男女、とにかくいろんな方々がリユースTを着ていた光景が素直にうれしかったです。

あの時に泥にまみれていたTシャツをみんなで洗って、きれいにして、新しい命吹き込まれて。

その新しい命を授かったTシャツをみんなが着ていて。

水害あったけど、元氣もらったー、とか。

いいライブでしたー、とか。

いいフェスでしたー、とか。

ボランティア楽しかったー、とか。

いろんな想いが新しく染み込んでるように見えた光景が、なにより、それが一番素直にうれしかったです。

——幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

自主練のときですかね。社協（社会福祉協議会）のボランティアで来ていた人がいて、工場内にある柄ものTシャツの山を見て「このゴミはどうなるんですかね？」と言われたときが嫌でした…。たしかに柄ものは廃棄になりますが、「ゴミ」って言われるのが複雑でしたね。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

初めて幡再に行くのって、勇気みたいなのが必要かと思うんですね。俺は友達の後押ししてくれたから、一緒に応募したんですけど。そのおかげで？ それから今までの生活が激変した、というか激動の日々でした。

地元の秋田から福島で除染作業をするようになったのも「幡再に行ったから」っていうことも、少なからずあります。

幡再に参加してから友達が驚くほど増えて、災害や政治のことが身近に感じるようになりました。いろんな災害があった場所でも動くようになって、そこでまた友達が増えて。たくさんの深い繋がりができています。

普通の友達とは全然違うんですね。たかだか数時間だけしか一緒にいないのにすごく深い繋がりになりますね。日常で知り合う「友人」とはまったく違う繋がりでですね。

いまの職場も幡再を通じて知り合ったところなので、俺の人生は、幡再“模様”な部分が濃いです。

行くのを悩む方がいるなら、幡再にメールしたほうが刺激のある人生になると思います。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

俺は、幡再を通して色んな人とたくさん繋がったと思うので、学校祭を開いたら、楽しそうだなあって思います。学校ですしね（笑）

いろんな部活や学部があるので、活動紹介しながらワイワイ

やっている人々を巻き込んで、幅再に行きたくても勇気がなかった人や、活動自体をあまり知らない人が幅再を通して、災害や農業とかを他人事じゃなく、身近に感じてもらえるように

「地元の茨城県が被災したときに『今だ!』と」

「毎日のように活動している人たちがいるので、今の自分が答えるのは申し訳ない…」と、当初は冊子の掲載を断っていたYさん。幅再が工場に入る以前から携わったメンバーの1人として、答えていただきました。

Y (仮名)
茨城県出身

——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

3.11後の活動を見てからです。

——常総での幅ヶ谷再生大学の活動に参加するのはTシャツ工場が初めてですか？

いえ、団子屋さん（和菓子屋「ゆたかや」）での作業が最初でした。その後、ブルーベリー畑での作業でした。

——団子屋さん、ブルーベリー畑での作業はいかがでしたか？

どちらも災害で積もってしまった汚泥をかくのが主な作業でした。作業しながら、日常生活が瞬間でなくなっちゃうんだな…と思ったのを覚えています。

ブルーベリー畑のお父さんが優しい方で、その方が「もう一度やり直したい」とおっしゃっていたのが印象的でした。

——そうだったんですね。

団子屋さんや、ブルーベリー畑の幅再の活動に参加して見た景色、活動場所へ向かう道中の景色、テレビで見た景色はどれも印象に残っていますが、正直、工場に着いたときが一番声を失った景色でした。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

水に浸かったTシャツを選別→洗濯→選別→出荷という、時間をかけて作業した苦勞を知ってもらえ喜びと、工場の存在を知られる喜び、廃棄されずに商品として世に出る喜びがありました。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

自分の活動を見て友人が活動に参加してくれ、洗剤を送ってくれた友人がいました。そして、リユースTシャツを買ってくれた方がいて、現場の状況を聞いて関心を持ってくれた方々

なっていけば、俺はうれしいですね。

その先に素晴らしい未来が待っているのかなあ、って思っていますので、ぜひお願いしたいですね。



がいて、見てくれている方がいたことがうれしかったです。

——幅ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

特になく、逆に自主練に参加すると分かる話になりますが、「自主練は楽しい!」ということは伝えたいですね。

Tシャツ工場は、幅再が入る前から工場に入っていたことで思い入れがありました。Tシャツ工場オーナーの長野さん、はっちゃん（SAVE THE HIROSHIMA）、当時一緒に入っていた人たちと、作業後に何度もご飯を作って食べたり、良い時間を過ごせたと思っています。

2016年10月も一年前に集まったメンバーで作業に入って、帰りにご飯に行ったりと、良い繋がりがあるのが現在でも続いています。

——幅ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

3.11での東北の活動は見るだけで、ずっと後ろめたさを感じていました。だからこそ、地元の茨城県が被災したときに「今だ!」と動けたと思います。そして今回の活動の機会や「このときだからこそ動く行動力」を教われたことは良い経験になりました。

五瀬身奈
北海道出身

「やっぱり音楽のすごさを分かってほしい!」

茨城県内に住む五瀬さんは、夫婦で常総での活動に参加し、先日第一子がお産まれになったそうです。生まれたばかりの我が子に託した想いとは。

——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

きっかけは「BRAHMAN」になります。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

社協（社会福祉協議会）に初めて参加したときのお手伝い先が、Tシャツ工場のオーナーの長野さんの工場でした。車を降りて初めて見たとき「うわぁ…」としか言いようがなく、感想というか、ただただ圧倒されていたように思います。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

リユースTとして出て行くことには感慨深いとかはあまり感じないのですが、自分がBRAHMANやSLANG、幅再、『ダッペ（Dappe Rock's）』等のリユースTを使用したTシャツを購入し、手元に届いたときに「このTシャツは自分が干した物だったらしい」、「この厚みはきっとこのメーカーでは?」、「この色落ちはAランクのTシャツだね」など旦那と言い合い、「自分も関わっているんだよね」と感慨深く、何だかうれしく、特別な感じがします（笑）

——うれしかった想いがあればお聞かせください。

TwitterやFacebookで、見ず知らずの人がリユースTの写真を投稿しているのを見て、妙な仲間意識というか…なんだからうれしいです（笑）

——幅ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

“立派だなあ”“行動力がすごいなあ”って、自分みたいに、「何かしたい!」「行きたいけど、どうしたものか…」と、もやもやうずうずしている者にとっては、行動するきっかけになるので、とてもありがたいです!

社協はなんだかイマイチな感じになってきて、自分が参加できるような場所は何かないのかと探していたところに、幅再本体が入ってきて、自主練が立ち上がったので、自分が何かしらの役に立つ機会を与えてくれて、本当に感謝です!

私の感覚では、この幅ヶ谷再生大学での活動はボランティアでもなく、手伝いでもなく…いや、手伝いではあるんですけど、友達の家遊びに行き、ちょっと手伝うみたいな、そんな感覚で。毎回、毎回、毎回楽しいです（笑）

——今後、幅ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

期待すること…なんだろう…継続ですかね。

——五瀬さんの旦那様は熊本出身とお聞きしましたが、現在幅ヶ谷再生大学は熊本で活動をおこなっております。そのことに対し、

「正直、活動に参加していない人たちには“受け入れられないんじゃないかな”と思っていました。」

「ギョーザ」の愛称で親しまれ、常総の自主練にも初期から参加する武田さん。幅ヶ谷再生大学への想いを訊きました。

武田英樹
栃木県出身

——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

Twitterで流れてきた「ワカメ漁」あたりの活動から知りました。初参加は、いわきでの活動からですかね。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

ただ呆然としました。周辺の住宅では屋外に家具を運び出していない限り、被害がやや分かりづらい状況でしたが、突如として工場の敷地だけ一目見ただけで甚大な被害であったのを感じさせる光景は何だか異様でした。

どのような感慨をお持ちですか？

地元熊本で活動していただいていることに、ただただ感謝しているようです。

報道が減り、こちらではなかなか知りえないことも活動の報告などから知ることができ、助かっています。また、地域に根ざした細やかな活動に感心しています。

幅再の活動に参加するのは、常総が初めてでしたが、自主練にも参加させていただき、いろいろな方と知り合うことができました。私たちが熊本の活動には参加するのは難しい状況ですが、常総で知り合った方たちが熊本に行き活動しているのを聞くと、本当にありがたく、すごいと思います。

私たちは自分たちができることを茨城の地でやっていきたいと思っています。

——お子さんが生まれたそうですね。おめでとうございます。将来に期待することはありますか？

幅再で活動している人の行動力や考え方、思いやりだったり、助け合いだったり。その精神をお手本にしてほしい。いっそ幅再に入って活動してほしい（笑）

自分は周りに生かされている。周りのおかげさまで、今ご飯を食べることができて、勉強ができて、友達と遊べて、好きなことができているんだと感じてほしい。

今いる場所だけではなく、視野を広く持って、いろんな人がいることを知って、過去から未来へと続いてはいるけど、未来は絶対ではなく、1日1日を大切に生きてほしいと思います。

やっぱり音楽のすごさを分かってほしい!

「ここまで繋がるんだよ? いろんな人! いろんなことが!」ということのすごさを感じてほしい!



イブハウスの吸音材として、いろんな形になって、たくさんの人に繋がっていくのを目の当たりにして驚きました。

——とくに、うれしかった思い出があればお聞かせください。

「東北ジャム」とBRAHMANの主催した「尽未来際～尽未来祭～」でTシャツを購入しようと、長蛇の列ができていたことに驚きました。とくに「Dappe Rock's」で、あの場にたくさんの気持ちと笑顔とリユースTシャツが集まった光景は感無量でした。

——武田さんは自主練にも当初から参加し、幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

嫌な経験というとニュアンスが違いますが、個人的に常総へ活動しに行くことに、少し後ろめたさを感じることがありました。

——後ろめたさ、ですか？

同じ豪雨で栃木県も被災地になったからです。

常総支援には、茨城県内や地元の方も多く、自分は地元の支



援を少ししか行っていなかったのが、後ろめたさみたいのはありましたね。今はあまり感じなくなりました。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

いわきの活動から参加させていただいて、参加するための「初めの一步」を踏み出すまでは緊張しましたが、いわきで知り合った人たちが本当に優しく面白く行動力がある人ばかりで、そんな人たちが周りにたくさんいるおかげで、幡再ではない現場にも踏み出すことに抵抗がなくなる感覚がありました。

Tシャツ工場に入るきっかけも、当時は面識がなかったのですが、いわきからの繋がっていた友人に誘われたのがきっかけでした。そこで集まったメンバーも、そのあと知り合うメンバーも、とびきり変わった人ばかりで楽しいですね（笑）

それもTシャツ工場のオーナーの長野さんの人柄や話してく

れた想いにみんなが集まってきて、また人々を呼んで繋がって、常総に来る理由も広がっていった気がします。

農家さんと繋がって、お米づくりのお手伝いをする方もいて、それぞれが良い雰囲気を作り出していて、とても面白いと感じました。

ひょんなことから幡再のお昼に餃子を作るようになって、常総と一緒に活動したメンバーで餃子を作ったんです。食べてくれた人達に「おいしかった

と言ってもらえたのは、とてもうれしかったです。

——だから、「ギョーザ」の愛称で呼ばれているんですね（笑）

いえ、宇都宮市出身だからです（笑）幡再に携わる方で、僕のことを「武田」と認知している方は少ないですよ。「宇都宮くん」か「ギョーザ」で定着しています（笑）

ギョーザなんだから「餃子を作ったら、みんな喜んでじゃない？」みたいなノリで餃子作り担当になりました（笑）

いわきでも餃子を作る機会をいただいて、快く手を貸してくれた常総のメンバーと共に生木葉さん（幡ヶ谷再生大学がお手伝いするいわきにある農家）に行き餃子を作りに行きました。いわきで良くしていた方々に少しでも恩返しのできたのかなと思うと、とてもうれしかったです。

——「ギョーザ」さんにとって、幡ヶ谷再生大学とはどんな存在ですか？

幡再は「初めの一步」のきっかけを作ってくれて、集まってくれたメンバーで考えて、学んで、行動して、トライ&エラーを繰り返しながら少しずつ形になって広がっていくことを実感させてくれる学舎で稀有な存在だなと思います。

どんな現場であれ、活動であれ、行き着く先、根底にあるものは、「人」と「人」なんだと気づかされた場でもあります。音楽がきっかけで動いている人が繋がれる場所です。

あとは本来、考えたり、学んだり、ましてや善行やら人助けなんてしない、ボーッとした自分でも参加できるので、「なんて僕が深い集まりだ！」とも思います（笑）

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これまでのように生きていくうえで起こり得る日常、あるいは非日常のあらゆることに対して、真面目に楽しく思いもよらない活動や学びなど、「型にはまらない広がり方」をする「場」であってほしいです。

「リユース T シャツはあそこに来ていた皆の願いの結晶だと思っています」

2011年から幡ヶ谷再生大学を見続け、支援し、今回の常総の活動にも参加してくれた千葉さん。東北にも自ら足を運び、「震災に免疫がついていた」と話す彼が想うリユースTシャツとは。

千葉
神奈川県出身

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANのライブによく行き、3.11以降の活動も見てきましたので、自然と知りました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見た

ときの感想を教えてください。

「Tシャツの山」を見たときの感想は正直、特に何か感じたことではないですね。

3.11以降、幡再の活動をずっと見ていましたし、自分でも東

北の沿岸部に足を運んだりもしていましたので、災害というものに免疫がついていたのもあったと思います。

そして、災害はどこに住んでいるのが起こりうるものだと思います。

Tシャツの山を見て、というより、音楽が好きでライブが好きで、好きなバンドのカッコイITシャツが買えたとき、それを着たときのうれしさっていうのを知っている人間としては、泥水に浸かってしまったアーティストグッズを見ると、とても他人事には思えなかったです。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

リユースTシャツという考えが出る前は、洗濯さえすれば、製品として使えるものがまだそれなりにあって、それ以外の色落ちしたTシャツも「洗えばまだ着ることができる状態なのに！色落ちさえしなければなあ」って、あそこへ手伝いに来ていた人はみんな、口々に「もったいない」と考えていたと思います。

リユースTシャツはあの場に来ていたみんなの願いの結晶だと思っています。グッズというのはアーティストを追いかける者にとっては一番、欲を集めるものかと思っています。

たぶん、これらを有名ブランドがリユースTシャツとして出していたら、こんなにも大きな動きにはならなかったと思います。

ボランティアで来た方、Tシャツ工場のオーナー・長野さん、賛同したバンドさん、売り場で売ってくれた方、買ってくれた方々、どれか一つ欠けてもこの願いは叶わなかったと思います。

——その際、嬉しかった想いがあればお聞かせください。

「人のために」というのが先ですけど、自分の願いが乗った時点でそれはもう自分のためであるから、素直にうれしいですね。

私は洗濯機を回すことが多かったんですけど、リユースTシャツになりそうな無地Tシャツをピックアップした人、洗った人、

「自分のためだけではない何かをしなければダメだ」

愛知県から夫婦で幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、常総での活動がその後の行動力、ひいては生き方すら変えていくことになる荒井夫妻。荒井家を代表して奥様の久美さんに話していただきました。

荒井久美
愛知県出身



——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

Twitterで名前を見かけてどんな大学なのかと思い、ネットで検索したのが最初だったと思います。

——どんな感想を持たれましたか？

特別な特技や意志を持った方々が参加しているのかなと思いました。まさか自分が参加できる日が来るとはそのときは思いもしませんでした。

干した人、タグ切りした人、それぞれ、うれしい思いがあると思います。

とくに、商品になったとき、あとは売っている現場にいて買ってくれたお客さんを見たとき、ライブでリユースTシャツを着ている人を見たとき、そのすべてがうれしいです。

——幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

あれだけ現場に行ったのだから一つぐらいありそうですけど、一つもありません。

あっ！一つだけ！

「ギョーザ」の作った餃子、まだ、食ってない（笑）

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

（東日本大震災での）支援物資の供給に始まり、公園づくり（石巻小淵浜みかん公園）、生木場ファーム（福島県いわき市にある農家）、熊本もそうですけど、幡ヶ谷再生大学を通じて、今まで本当にいろんな経験をさせてもらったし、自分が関わるイベントにまで出展してもらい、お世話になってばかりで本当に感謝しています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

期待というよりは、まず期待しなくても自分発信でもっとできることをやらなきゃ、という気持ちが強いです。

幡再は何かしたい人の受け皿になっていると思いますし、人員が必要な場合は都合さえ合えば参加したいので、そういう機会をこれからも提供し続けてほしいです。



——なぜ、参加を決めたのですか？常総での活動が初めてですか？

常総が初めてです。わたしは音楽的にも幡ヶ谷再生大学に参加される方々とはまったく違う音楽を聴いてきた人生で、音楽からこのような行動に繋がる世界は初めてでした。

ライブに行き、幡再のブースを見たり、ブースに立つ人の話を聞くうちに自分も「少しでも変わりたい」「行動に移したい」と徐々に思うようになりました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

初めて常総の自主練に参加したのは災害発生から2カ月あまりが経ったころでした。そのときには、既にいくつかの大きな山に分けられていて、これらはほんの一部で、まだまだ工場内

にはこの何倍もあると聞いて、被災した本人でもないのに途方に暮れた記憶があります。

Tシャツの山には、たくさんの方のバンドやアーティストさんの名前が入っていて、私たち夫婦はライブに行くことが趣味であり、好きなバンドのTシャツやそのときのツアーTシャツなどを普段から大切に着ています。

泥まみれになったTシャツの数々も「誰かの大切な一枚になるはずだったのかも」と思うと切ない気持ちになりました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

リユースTシャツが購入した方の手に渡り、それを手にした方はTシャツを着るたびに常総で水害があったことを必ず思い出さずすよね。

実際、そのリユースTシャツがどんな場所で、どんな過程を経て再生されたのか、自分の目で確かめたかったので自主練に参加しました、という方とも一緒に活動しました。

一般に言うリユース（再利用）という言葉に加え、ゴミになるはずだったものが、人の意識や行動すら変える意味のあるものに生まれ変わったことに深い感慨をおぼえます。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

「Dappe Rock's」でのリユースTシャツ販売のボランティアにも参加できたことです。Tシャツ工場に何回か足を運ぶうちに、そこで出会った方々との繋がりもできました。

もちろん一緒に活動する機会がなかった方も大勢いらっしゃいますが、みんなでTシャツの山から使えるものを発掘→洗濯→干す→たむ→仕分ける→タグを切る→プリントする過程。

たくさんの方の手を通して、再生されたTシャツをいち早く手に入れるために、朝早く並んでくださった方々や、「きれいな物より、できるだけ色落ちのダメージが大きい方がいい」と言ってくださった方も、多くいらっしゃいました。

Tシャツ工場のボランティアで、リユースTシャツとして商

品になるまで多少なりとも携わることができ、それを喜んで購入してくださるところを。当日のたくさんの方のボランティアの方と共に見届けることができたことは、とてもうれしい経験でした。

——帽ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

BRAHMANのTOSHI-LOWさんがライブのMCで「20年前の阪神淡路大震災のときの自分はどうかだったか」という話を何度かされていて、それを聞くたびに「まさに今の自分のことだな」と楽しいはずのLIVEに行くたびに情けなくなりました。

「自分のためだけではない何かをしなければダメだ」と思い続けていました。そんなときに常総で水害が起こり、翌月宮城県女川でおこなわれた『東北ジャム2015 in女川』での帽ヶ谷ブースで常総自主練の話を帽ヶ谷再生大学のゆかりさんと常総の自主練にも積極的に参加していた生徒の佐藤慶さんから直接伺いました。

話を聞いて「特別何かに秀でているわけでもない自分でも、洗濯物を干すことや畳むことならできるはず」とそれから十数日後に生まれて初めてのボランティアに参加しました。

その後、わたしも主人もそれぞれが行けるときに帽ヶ谷本隊でのTシャツ工場、ブルーベリー畑、若宮戸の現場、そしてTシャツ工場の自主練に参加するようになっていきました。

——人が変わったような行動力でですね。

そうかもしれません。2016年4月に熊本県で地震が発生したとき、私は社協（社会福祉協議会）のボランティアに数日間ですが参加しました。主人は東日本大震災のときに職場に災害支援要請があったにもかかわらず、当時の仕事内容や置かれていた状況などを理由に結局行かなかったんです。

そんな夫が、熊本へは何の躊躇もなくすぐに向かいました。お互いに被災現場を目の当たりにしながら活動し、熊本でも常総でも被災された方の話を直接聞いたことをきっかけに少しですが、変わったと思います。

吉田晃三
福島県出身



で、リユースTシャツを見たときに災害があったことを思い出してもらえれば本望ですね。

風化させないでもらいたいです。

——活動を通して、うれしかった想いがあればお聞かせください。

Tシャツ工場には、洗い終わった無地のリユースTシャツをストックしておく棚があるんですね。Tシャツで山積みになっていた棚の在庫がなくなって、Tシャツ工場のオーナー・長野さんから「あの棚はもういらないから、解体していいよ」と言われたことが自分の中では心から喜べてうれしいことでした。

リユースTシャツが減っている何よりの成果ですから。

——帽ヶ谷再生大学の活動に参加し、危惧していたことがありましたら教えてください。

一番は怪我ですね。工場や建物が老朽化と水害により、建物の床が抜けやすい箇所があったりします。自主練などに参加する人が、事故に遭遇してしまうことが一番の懸念材料でした。

——吉田さんは、帽ヶ谷再生大学がボランティアで入った若宮戸（常総市の地名）の活動にも参加されていますね。どのような印象をお持ちですか？

「まさるな T シャツよりも、はるかに価値があると思っています」

ボランティアとして従事する際に活動する場所を探していたところ、帽ヶ谷の活動を知り、現在に至るYさんは時間があれば自主練に通うまでになっている。彼女が抱く“帽ヶ谷らしさ”とは。

Y（仮名）
茨城県出身

——帽ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

3年くらい前の音楽イベントのブース出展で知りました。今回の常総での活動はSNSを通じて知りました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

最初に工場に行った日は、すべてがTシャツの山と認識しなかった気がします。その後、何度か訪れて奥までつづくTシャツの山に、然としたのを覚えています。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

Tシャツ工場で作業されたみんなの「力」と「想い」が詰まったTシャツは、重みがあります。それは新品のまさるなTシャツよりも、はるかに価値があると個人的に思っています。

今までご一緒させていただいた方の中に、遠くから時間やお金をかけて来られる方も多く、この土地に住んでいるだけでは出会えなかった方々と一緒に作業できたのは、かけがえない出来事ですし、大切な仲間だと感じています。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

無地のTシャツの発掘、洗濯、干して乾かして、仕分けして畳む…と、ひたすら続けてきた作業で蘇ったTシャツを、復興イベントの「Dappe Rock's」で、たくさんの方に自分の手でお渡しできたのは貴重な経験でしたし、本当にうれしかったです。

——活動に参加し、残念な経験がありましたら教えてください。

若宮戸は、「自然のパワーは人知を超えてすごい」としか言うようになかった印象です。

——福島県在住とお聞きしましたが、お隣の県とはいえ相当な距離があります。常総まで来る原動力はどんなものだったのでしょうか。

活動に参加したのは、SNSやメディアを通して見るよりも、実際に自分の目で見たかったのが大きいと思います。

——帽ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

今後も震災は起きたりすると思います。初めのきっかけは何であれ、帽ヶ谷再生大学に参加してみよう、次は違う団体のボランティア活動に参加するきっかけになればいいかなとは思っています。

——今後、帽ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

常総は、Tシャツの片付けが終わったら、それで終わりではなく、被災した人たちがその周囲の人たちから、震災があったからこそ震災前よりも「もっと良くなった」と、笑顔が溢れるようなことをやっていてもらいたいですね。

新たに震災に見舞われた場所で、少しでも被災者の力になれるようなことを、これからも永らく続けてほしいと思います。



残念だったことは、掘り出して出てきた無地のTシャツが傷みすぎてしまっていてリユースTシャツとして復活させられなかったこと…でしょうか。

——帽ヶ谷再生大学に対する想いなどあれば、お聞かせください。

自分が住むこの地で災害が起きて、初めて何かできることを…と気持ちは前向きになったものの、その受け入れの窓口が分かりにくいために立ち止まる時期がありました。

帽ヶ谷は「行動する人に対して、すぐに受け入れる」というスタンスであること、さらに帽ヶ谷本隊の作業日以外でも、自主練という枠で、作業のお手伝いができるということが、とてもあ

りがなかったです。

そして、いかにも「ボランティアに行く」という仰々しい感じではなく、自分にできるお手伝いをするという「継続」に繋がりました。

道を作ってくださったことに、本当に感謝しています。

——常総の自主練に多く通われているそうですね。どのような方たちが集まるのですか？

みんな自発的に動かれる方の集まりだと思います。

どうやったら効率良く作業が進められるかを相談したり、一

緒に知恵を絞ったり、声を掛け合いながら作業をするということとは、毎度違うメンバーで作業を進める中で一番大切な連携プレーが自然にできていて、一年近く通う今でも驚きと感動を覚えます。

——今後、幅ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

ほぼ自主練生としての活動しかしていない私が言うのはおこがましいのですが、この常総での活動だけを見ても「人・繋がり」を強く感じます。これから新たな土地での活動や、プロジェクトが発足されたとしても、今と変わらず「幅ヶ谷らしく」継続して行っていただきたいです。

ゆう

東京都出身

「自然災害の恐ろしさを改めて痛感しました」

東京から常総に足繁く通うゆうさんにとって、常総の地とリユースTシャツとは…。先日、熊本にも訪れ、幅ヶ谷再生大学へ馳せる想いを訊きました。



——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

ライブやフェスに行った際に、幅ヶ谷再生大学のブースがあるので名前は知っていました。冊子をいただき、ブースにある写真を見てどのような活動をしているのかを知りました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

こんなにたくさんのTシャツが水害に遭ったのか、と最初はとてもしつかりしたと同時に、自然災害の恐ろしさを改めて痛感しました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

リユースTシャツとしてたくさんの方が、手にとってくださるのはすごくうれしいことだと思います。

いろいろな団体さんやバンドさんとコラボしてTシャツを作り、リユースTを着ている方を見ると「あれはあのとき洗濯したTシャツかな？」「あのときにプリントしたTシャツかもしれない…」と勝手に見て楽しんでいました（笑）

Tシャツを購入される方の中には通販で届いて、あまりにきれいな状態なので「リユースTシャツじゃない！」といったご意見もあったようですが、逆にリユースTシャツに対してさまざまな考えがあるのだと思いました。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

活動に参加して、毎回さまざまな職種の方、年代の方と一緒に活動できるのがすごく貴重な体験だと思っています。ほとんどの方が音楽好きなので、音楽の話をしながら活動するのも、楽しみのひとつになっています。

——幅ヶ谷再生大学の活動に参加し、苦労した経験がありましたら教えてください。

毎回楽しく活動できています！ が…真冬の洗濯がとても寒くて大変でした…。

——幅ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

年齢、性別、職業など関係なく、たくさんの方が活動に参加していて、試行錯誤しながら活動しているので、すごく考える場となっています。「行動した分、返ってくるな」と思いながら、日々活動に参加しています。実際、そう感じています。

——ゆうさんにとって、東京から常総まで通う原動力はどのようなものでしょうか。

常総に通いはじめたころ、仕事を辞めてフリーの状態でした。次の仕事を始めるまで、何かを“継続”すること、人との“繋がり”を大事にしたいと思ったことが、原動力になったのかもしれないです。

続けていくことで工場の状況が分かり、はじめて参加する自主練生に作業内容を説明できたりすることもできました。だんだん工場の景色が変わるのを見て、前に向かっていくと実感することができました。

人との繋がりも、幅ヶ谷再生大学の活動に参加していなければ出会わなかった人がたくさんいたと思いますし、その人たちと活動しながら話をすることで、学ぶことがたくさんありました。ここで繋がった人たちとこれからも繋がってほしいし、常総が今後もたくさんの人と人とを繋いでいく場になってほしいです。

——今後、幅ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

東北であったり、熊本であったり、全国各地で活動をしている幅ヶ谷再生大学の活動に今後もできる限り参加し、寄り添っていきたいと思っています。

「同じ関東で、すげーヤバいことが起こった！」

広島のリユースTシャツ団体「SAVE THE HIROSHIMA」に籍を置きながらも、幅ヶ谷再生大学の活動に参加する法地さん。平成27年に関東・東北豪雨起きた直後に現地入りした際の状況を話していただきました。



——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANですね。東日本大震災のときの活動で刺激を受けて、いつか参加してみたいと思っていました。

ただ、東北での活動だと埼玉からは遠くてなかなか参加できなくて…。

そんなときに常総で水害があって「同じ関東ですげーヤバいことが起こった！」って他人事にならなくて、2日後に嫁と物資を届けに常総へ行きました。

当時は、まだまだ水も引いてないし、災害対策本部の市役所が水没して機能していませんでした。通行人の方に、避難所の場所を聞いて持って行きました。そんな状況でしたから、できるだけ復旧作業をしようと思ったんです。

ただ、そのとき誰を頼っていいのか、分からなかった。そこで「SAVE THE HIROSHIMA」と縁があったジャパンホープの“はっちゃん”を頼って作業し始めました。プリント工場もそのとき知りました。

「いろいろなアーティスト、ボランティア団体、たくさんの方々活動してきたからこそ、リユースTシャツとして生まれ変わったのかな」

おもに自主練に参加してきた木村さんにとって、リユースTシャツの存在とはどんなものなのか。その思いを訊きました。

——幅ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

詳細は忘れてしまったのですが、フェスやMAN WITH A MISSIONのライブ会場にあった復興ブースで知りました。常総市での活動は、幅ヶ谷再生大学のTwitterで知りました。

——その後、幅ヶ谷再生大学とはどのような関わり方だったのでしょうか？

私は、Tシャツ工場の自主練に参加することが多かったのですが、人との繋がりを、ものすごく実感しました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

すさまじい光景だな…と。

私もバンドTシャツを着る機会が多いだけに、胸が締め付けられるような思いでした。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に

——常総の水害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

然とした。「これ、何？」って。

Tシャツの量が多すぎて、復旧までに時間がかかるのが容易に想像できました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

すごい発想力だと思いましたね！普通に考えたら、廃棄ですもんね。いろんなアーティストが協力的なことにも感動しましたね！僕も、リユースTシャツを15着くらい買いました（笑）。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

自分たちが洗って、干して、畳んだTシャツが、ライブとかに行くに着てくれる人がいるときは、すごくうれしいですね！

——幅ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

幅ヶ谷再生大学は行動が早いし、ほかの団体がやらない活動をしていたりするので、尊敬しています！「SAVE THE HIROSHIMA」でも参考にさせてもらっています！

——今後、幅ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

期待はあんまりしてないですよ（笑）

悪い意味合いじゃなくて、期待しなくてもいろんな行動してくれるんで「こうしてほしい！」っていうのはないですよ。

ただ、必要とされなくなるまで続けてほしいですね。

法地知紀

埼玉県出身



出ていくことの感慨などあれば教えてください。

幅ヶ谷の活動はもちろんのこと、いろいろなアーティスト、ボランティア団体、たくさんの方々活動してきたからこそ、リユースTシャツとして生まれ変わったのかなと思います。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

Tシャツたちを“お嫁に出す”ような感覚で、プリントが施

されたリユースTシャツが完成した姿を見たときは、うれしかったですね。リユースTシャツをライブ会場だけでなく、スーパーや観光地などでも着ている人を見かけたときは、本当にうれしかったです。

リユースTシャツを手にとって買っていく人たちって、みんな色落ちが激しいやつを選んでいくんですけど、すごく良い笑顔をしていくんですね。

それが何ともうれしい気分になります。

——木村さんにとって『Dappe Rock's』は集大成でしたか？
 被害を受けたTシャツからの発掘・洗濯・仕分け・プリント作業の手伝い・出荷準備・販売すべての工程を見て、この活動に参加してただけに、リユースTシャツを着た方であふれた会場は、本当に感慨深かったです。

「そのときの一体感は、本当にうれしくもあり楽しかった…」

常総市の隣町に住み、自主練にも足繁く通う福田さん。関東・東北豪雨の災害があったあの日から『Dappe Rock's』までの日々を振り返っていただきました。

福田順子
茨城県出身

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

the HIATUSが好きで、細美武士さんが活動に参加されているのを知り、そこから幡再を知り、常総の被害をきっかけに活動に参加するようになりました。

——常総の被害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

とにかくすごい量だなと思いました。自分が最初に目にしたときは、すでに片付けがかなり進んだ状態で。変な言い方ですが、山ごとに整っていて、本当に膨大な量で。大変な作業だったんだろうな、と思いました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

使えそうなTシャツを発掘して、洗濯して、取り込んで、仕分けして、タグ切りして、プリントされて、物によっては畳んでパッキングして、と一枚一枚すべて手作業でおこなっていることを知ったときは驚きました。一連の流れをお手伝いして、出荷しただけでもうれしいです。

それをみなさんが着用されているのを見たとき、特にライブ会場などで見かけたときは、本当に感慨深いです。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

THE BACK HORNの山田将司さんが『Dappe Rock's』のアーティスト用のTシャツを普段から着用されているのをSNSでお見かけし、うれしくなりました！

『Dappe Rock's』の開催が決まったとき、イベントのオフィシャルTシャツをTシャツ工場のオーナー・長野さんの工場ですべてプリントすることになり、大変だったみたいです。

あの時期、長野さんはもちろん、自主練生も「総出」の時期でしたね。現在もそうですが、すべてのTシャツ一枚一枚、手刷りでプリントされています。イベントの日が近づくと、

——『アコチル（ACO CHILL：静岡県にて開催）』にも参加し、ワークショップのお手伝いをされたそうですね。そのときの感想をお聞かせください。

アコチルでの思い出は、大人も子供も楽しんでいる光景が印象的でした！

ワークショップに足を運んでくださった方々も、Tシャツ選びから、シルクスクリーンの場所決めまで、すごく楽しんでいましたね。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、助け合い、人との繋がりをなどいろいろなことを学びました。感謝しています！

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

情報発信を含め、被災地に寄り添った活動を続けていってほしいです！



夜遅くまで“商品”を畳んだりする日もありましたね。そのときのみんなの一体感は、本当にうれしくもあり、楽しかったです。Tシャツは事前通販もありましたが、当日会場でも販売されているのを目にして、在庫がどんどん減っていった、会場のご近所さんにも買いに来られていたと聞きました。イベント終了後も『Dappe Rock's』のTシャツをいろんなライブ会場で見られ、本当にうれしいです。

——『Dappe Rock's』は、福田さんにとってどんなイベントでしたか？

被害があった当日、『Dappe Rock's』の開催場所は川の中だったのに、その場所が綺麗に整備され、あんなにも大きなステージが建ち、好きなバンドの方々が演奏するなんて、本当に夢みたくてでした。

こんな何にもない常総市に、各地からわざわざ来てくださったお客さんたち、クラウドファンディングに参加してくださった方々、幡再をはじめとするボランティアスタッフの方々、何より開催することを理解してくださった、ご協力いただいた地元の方たち、主催のDappeさんとTOSHI-LOWさん、参加してくださったアーティストの方々に、心よりお礼を言いたいです。本当に感謝しています！

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

幡再には、本当に感謝しています。たくさんキッカケを作ってくださいました。被災者ではない自分が言うのもおかしいかもしれませんが、被害直後にBRAHMANの方たちが被害状況

を見に来てくださり、それがどれだけ心強かったことか。

私がいつも通っていた通勤路は、被害が大きい地区でした。水害後、その道を通ると、道路には使えなくなった家財道具がズラリと並んで、田んぼには、どこから流れてきたのか分からないようなものが落ちていたり、毎日その光景を目にしながら、悲しい気持ちで通勤していました。

会社に着けば、当たり前ですがいつもと変わらない職場の風景。隣の市では大きな災害があったのに、この状況は何なんだろう…。虚しさや違和感を感じながら、仕事をしていました。そんなときに、幡再の活動が常総で始まって、心強かったですし、励みになりました。

活動に参加こそできませんでしたが、同じ市内に幡再の方々が活動してくれているということが、私のもっと力になれるよ

「日本各地に幡再生がいてくれたら良いなと思います」

幡ヶ谷再生大学陸上部にも所属し、足繁くTシャツ工場に通い詰める出沢さん。その場所で出会った人々への想い、幡再への想いを訊きました。

出沢純一
茨城県出身

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANの公式Twitterアカウントをフォローしていて、そのリツイートで知りました。SNSをマメに見るほうではないですが、意識の高い行動に興味を持ちました。

それからTwitter等で復興再生部をはじめとした幡ヶ谷再生大学の活動をチェックしていました。常総の活動については、身近な場所なのになかなか現場での活動に参加できず、歯がゆい思いをしていました。

——常総の被害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

山どころではなく、山脈！と驚きました。

写真や画像よりも近所で見る“山”は、厚み・高さや湿度のようなものも含み、重厚感に圧倒されました。けれども個人的な考えで、山が高ければ高いほどモチベーションを上げてしまいがちで、自分が頑張るべき早急すべてのTシャツを洗って干してやる！と、やる気が燃え上がった。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

自然やエコという分野に興味があったので、「再生」されること自体に賛同していました。リユースTシャツは、水害でついた色味の濃淡痕がTシャツの“味”として喜ばれていることに最初は驚きました。廃棄されるはずのTシャツが商品として生まれ変わり、お客さんに喜ばれる。商品としてそれが一番大事なことのようない感じがします。

そのリユースTを自分の好きなバンドが物販で使ってくれたり、着てくれたり、またそれを見たファンが同じように着てくれることは本当に感慨深く思います。

——うれしかった想いがあればお聞かせください。

幡再のブース出展をお手伝いするとき、リユースTの完成ま

うに頑張らなきゃと、後押ししてくれました。

その後は、幡再の常総の活動にも参加するようになって、自主練に行き始めるようになりました。もともと地元が好きじゃなかったんですが、こんなに何にもない常総に来てくださる方がいるし、自主練は本当に楽しいし、数えきれないほどの出会いがあった。

幡再で仲良くなった友達たちと、ほかの場所での活動にも参加するようになり、地元がキッカケとなって楽しいことが増え、今では逆に地元が好きになりました（笑）

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今までと変わらずなく、音楽やスポーツを通して、人が集まり、楽しく活動できる、学べる、そして何かを得られるような場であってほしいです。



で少なからず携わっている自負があるので、説明に熱が入ります。

ライブやイベント会場などでリユースTを着ている人を見たとき、「自分が汗を垂らしたTシャツかもしれない！」という達成感まではいかなくとも、地道な作業が報われたようなうれしさをつねに感じます。同じ気持ちを共有して

くれているのかもしれない、という一体感も湧いてきます。

——積極的に幡ヶ谷再生大学の活動に参加していると聞いています。その原動力はどんなものですか？
 少しでも早くTシャツの山をなくしたいからです。

なので、自主練などの活動にもできるだけ参加したいのですが、生活があるのでそういうわけにもいきません。それを理解していても、その葛藤に苦しむことがあります。自分の生活の優先順位で、どうしても生まれる食い違いのやりくりには困っています（笑）

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

幡再は、音楽と同じような思考を持った仲間が「復興再生」という行動で、力を合わせている、ということに驚きと感激を覚えています。

自分でも一緒に行動していることに誇りを持っていますし、仲間として同じ活動をする幡再生には深い尊敬と信頼関係が生まれています。個人的に狭い世界の仕事をしていますが、幡再での出会いで新たな価値観や知識を得て、間違いなく自分が著しい成長曲線で成長できています。

幅再でできた仲間は無理につくった仲間ではありませんので、感謝の気持ちしかありません。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。
絶対に良い行動をおこなっているの、もっとアナウンスし

「自分の中にあるシンプルな気持ちを大事に思えるようになり…」 平田亜衣さん a.k.aシラス野郎

茨城県出身

平田さんが出会った幡ヶ谷再生大学とは？

ほぼ毎回の活動に参加し、活動を通して変わっていく“自分”を話していただきました。



——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2013年の猪苗代湖野外音楽堂建設予定地で行われた東北ライプハウス大作戦アコースティックライブです。

その前日の「風とロック芋煮会」に参加したときに、初めてBRAHMANのライブを拝見し、深く感銘を受けました。あまりの衝撃に涙が止まらなくなりました。

自分自身がなぜ泣いているのか？

なぜこんなにショックなのか？

初めて感じる感情でした。

次の日に、猪苗代湖野外音楽堂建設予定地でTOSHI-LOWさんがアコースティックライブをするということを知り、自分のあの感情はなんだったのか？どうしても知りたくて、まるで導かれるように参加しました。

そこで、幡ヶ谷再生大学に出会いました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

初めて参加したときに、「あそこの棚の上に土の跡があるでしょう。あの辺りまで水がきたんですよ」と約2メートルの高さまで水が流れてきたのだという、被害の状況を教えていただき、言葉を失いました。

歩くスペースもないほど汚水に浸かってしまったTシャツ、タオルなどが山積みになっていました。鬼怒川が決壊した周辺は、まるで震災後のような光景が広がっていました。雨も、風も、一瞬でひとつの町を破壊することができるのだと、自然災害の恐ろしさを改めて痛感しました。

正直なところ、膨大な数のTシャツやタオルの山を目の前にして「本当にこのプロジェクトは成功するのだろうか？」と頭をよぎりました。しかし、同時に「絶対成功させたい。できる

て活動が広がればよいと思います。もはや、天災は日本のどこで起こるか分かりません。その土地その土地で、何かあったときにはすぐに簡単に活動できてしまうくらいに、日本各地に幡ヶ谷再生がいてくれたら良いと思います。

限りTシャツを再生させたい！」と闘志も沸いてきました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

活動し始めのころは、洗濯して、無地のTシャツを発掘して、洗濯して…と延々と繰り返し作業をしていました。「本当にこれで大丈夫なのかな？」と不安になるときもありました。活動に参加するにつれて、アーティストの方たちやフェス等でリユースTシャツの発注があり、次第に協力してくれる方たちが増えていきました。そして、ライブ会場などで着てくれる方を見かける機会も増えていきました。

「もしかしら、それは私が発掘したTシャツかも」と心の中で微笑んでしまう自分がいました。この活動を通して、Tシャツが色落ちしていればしているほど格好良いと思うことがあります。

本当だったらダメな部分なのかもしれないのだけど、それを「個性」として認めてあげると愛着が湧いてきました。もしかしら、人間関係の中でもそのようなかもしれないと感じました。「自分とは違った部分を認め合う、尊重し合う」。そのことの大事さをこの活動を通して学びました。幡再に来れば来るほど、自分にとってプラスのパワーになっているのを感じています。

——とくにうれしかった想いがあればお聞かせください。

今回の活動が「Dappe Rock's」として、ひとつの形になったことです。

老若男女がたくさん集まり、会場にいる人たちがみんなリユースTシャツを着てくれていて、笑顔で音楽を楽しんでいる姿が焼き付いて、忘れられません。会場を見渡すと、幡再で知り合っただけの仲間たちが、たくさんいました。

すごく温くて、穏やかな気持ちでした。哀しく、辛いことが起こってしまった町に、みんなが笑顔の楽しい思い出を上書きしていく新たな日、「希望の一步」を感じました。

——「希望の一步」ですか。それ以前に「希望の一步」を感じたことはありましたか？

2013年に猪苗代湖野外音楽堂建設予定地で、学長（＝TOSHI-LOW）が弾き語りで歌ってくれた曲が「満月の夕」でした。被災地に寄り添って、共に歩んできた曲だと知りました。そこで幡再に出会い、ボランティア活動に興味を持ち始め、少しずつ自分のできることはしていこうと、心に誓いました。

そして、自分が生まれ育った故郷で水害がありました。「微力だとしても何かしたい！」と行動しました。そして、たくさんの仲間ができました。

水害被害を受けてしまった常総の町に学長が「満月の夕」を贈ってくれました。自然と涙がこぼれました。温かい感情に包まれました。

あのときの出会いは、この日を迎えるためにあったのではないが、偶然ではなく必然だったのではないかと、思えるほどに音楽の力、奇跡を感じました。

——幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、嫌な経験がありましたら教えてください。

活動はとても楽しくて、嫌な経験をしたことは特にありません。初めて会う人達でもすぐに仲良くなってしまうので、毎回常総に来るのが楽しみで仕方ないほどです（笑）

しいて挙げるなら、この「Tシャツ再生大作戦（リユースTシャツを使ったプロジェクト）」のことを知らない人に、「ボランティア活動なんてしてすごいわ。私はできないけど」と、言われたことがあります。

ボランティアに対しての苦手意識を持った人が、まだまだ多い気がします。たしかに、自分も初めて幡再に参加したときは「今からボランティアをするんだ！」と考えすぎて、緊張したりもしました。

でも、何度も参加するうちに、その場所ですぐに仲良くなれるようになって、ボランティアをしに行っているという気持ちより「会いたいから会いに行く！」という気持ちのほうが強くなりました。

ボランティアに参加すると年齢も、性別も、職業も、違うさまざまな人たちに出会えるので、自分の視野が広がってプラスになることが多いように思います。自分が得意なことを持ち寄って、現状をより良くしよう、と知恵を出し合いながら、それぞれが行動しています。

「2つの都市が、こうしてリユースTシャツで繋がるのが、とても素敵なこと」

2015年から幡ヶ谷再生大学の活動へ参加する金子さん。夫婦でも参加し、自走線にも積極的に参加しています。リユースTシャツに対し、現代人が持つべきワールドワイドな視点を話していただきました。

金子美和

埼玉県出身・

現在は東京都在住



——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANのTwitterで、幡ヶ谷再生大学の存在は知っていました。2015年の10月に宮城県女川で開催された「東北ジャム2015 in 女川」で何気なく幡再ブースに立ち寄ったとき、幡ヶ谷再生大学のゆかりさんに「活動にも来て!!!」と、力強く言われたことがずっと印象に残っていて、常総での活動ならば家からそれほど遠くないので参加してみようと思いました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の“Tシャツの山”を見たときの感想を教えてください。

初めて見たときは、ただただあ然としていました。

“山”の大きさに、これが全部Tシャツだとは、にわかには信じ

られませんでした。今は廃棄の作業をしているのですが、たった1つのパレットの山を片付けるだけにどれだけの労力と時間がかかるかが実感としてわかります。

今の自分が当初の「あの山」の大きさを見たら、もっと途方に暮れてしまったかも知れません。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

世界には着るものにも困っている国もたくさんあるのに、洗えば十分着用できるTシャツを廃棄しなければいけないなんて、とてももったいないことです。Tシャツ再生大作戦によって、たくさんの方の手に渡ることで、本当にうれしく思います。

ずっとTシャツに触れていると、すっかり愛着も湧いてきて、生まれ変わったTシャツたちもなんだか喜んでるように見えます！

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

広島に行ったときに、ボランティア団体「SAVE THE HIROSHIMA」の常総リユースTシャツを使って作ったTシャツが売られているのを見つけて、すぐに購入しました。

常総の水害の約1年前、広島でも土砂災害がありましたよね。豪雨による被害に見舞われた2つの都市がこうしてリユースTシャツで繋がるというのが、とても素敵なことだと思います。

また、全国どここのフェスに行っても「Dappe Rock's」のTシャツを着ている人がいることもうれしいことです。私が作業したのもなんて大量の山の中のごくごく一部ですが、思わず「私が

洗ったTシャツかも！」なんて思ってしまう。

——幡ヶ谷再生大学の活動に参加し、様々な経験がありましたら教えてください。

まったくないです。むしろ楽しい経験だけで、普通に生活していたら出会えないような、さまざまなバックグラウンド、住まい、職業の仲間たちと出会えて、さらに幡再で出会った仲間とライブハウスで再会できたりするので、とてもうれしいです。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

1回の活動でできることは限られていますが、「ボランティアってむずかしそう、大変そう」と勝手に考えている人の壁を取っ払う良いきっかけになると思います。

私も、幡再の活動に参加してみて、「これはまだまだ人の力が必要だし、私にもお手伝いできることがありそうだ」と自主練に参加するようになりました。幡再に行くようになってから、以前よりも行動的になった気がします。

とても感謝しています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからも、できるだけ長く、たくさんの方々の活動を継続していてほしいです。それから、いつもおいしすぎる幡再メシ、これからも期待しています！

幡再のおかげで、食べ物や生産者さんへの感謝の気持ち、みんなでごはんを食べる楽しさを再確認できました。

田邊洋祐

東京都出身・

現在は愛知県在住

「『人間復興』は、本能的に的を射ていると思います」

愛知県から足繁く常総へ通い、最近では熊本にも訪れる田邊さん。幡ヶ谷再生大学陸上部にも所属する彼に、震災と復興再生部、自主練への捉え方を訊きました。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

BRAHMANを追いかけていましたので、自然と知りました。3.11があって、当初自分がしたことは支援金やライブ会場でレトルト食品の寄付などで、直接現地に赴いての活動に関わることは皆無でした。

もちろん支援金や物資も重要だとは思いますが、直接的でないことに気持ちの面でモヤモヤしていました。

「現地に行って、見て、感じないと。テレビじゃ分からないことがたくさんある」という学長（＝TOSHI-LOW）の言葉に触れられ、とにかく現地に行ってみようと思いました。

——実際、行動には移せましたか？

はい。2012年5月、福島県いわき市に行きました。いわきマリナー受付のおかさんから津波被害のお話を聞き、「遠くから来てくれたお礼に」と手編みのグラス敷きをいただきました。

津波に流され、陸に船が置き去りにされているすぐ横を下校中の中高生が平然と横切っていくのを見て、非現実的な日常を感じました。

2013年1月初頭、福島県双葉郡広野町、避難区域ギリギリに位置する無人のファミリーマートで、まだ世間は年始休みの時

期でしたが、原発作業員の方々を乗せたバスが現場へ向かうのを見送りました。

そのまま北上はできないので一旦内陸に入り、仙台から北へ向かいました。リアスのきれいな海岸と、廃墟になった旅館や瓦礫が詰まった大量のコンテナバックを目に刻み、ただ北へ向かいました。釜石でおいしい海鮮丼を食べ、宮古の浄土ヶ浜まで行きました。

——東北に赴き、どんな感情が芽生えましたか？

被災地に足を運び、言葉では表せない感情を胸に、まずはいざというときに行動できるよう自分自身を鍛え直そうと、2014年に幡ヶ谷再生大学陸上部に入部しました。毎月最低でも100km走ることを心がけ、2015年勝田マラソンで初めてフルマラソンを走り切りました。

——幡ヶ谷再生大学復興再生部より先に陸上部に入部したので

すね。はい。2015年9月、台風18号による鬼怒川決壊の被害を受けた常総市に幡再が入る募集がかかったときに、初めて復興再生部として参加しました。最初は、お団子屋さんの「ゆたかや」周辺の掃除をおこないました。



その翌日は五反田から鎌倉間の42kmを走る、陸上部恒例行事の「カマクラ」にも参加するハードな2日間でしたが、充実感に満ちていました。

その後もブルーベリー畑、Tシャツ工場、若宮戸（＝常総市の地名）といった常総市での幡再の活動に参加してきました。同じ地域でも、現場が変わると異なる被害状況を目の当たりにし「傷ついた人たちの助けになりたい」という気持ちが込み上げてきました。

——常総の水害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

第一印象としては、ただただその規模に圧倒され、手強さを感じました。それでも少しずつ“山”を切り崩して、空いたスペースに洗って乾かしたTシャツを保管するための棚を作ったり、製品として出荷待ちのTシャツを段ボールに詰めてコンテナの上に乗せたり、と。

Tシャツ工場に何度も足を運ぶに連れて“山”が少しずつ減り、再生に向かっていくさまは、進捗状況の指標にもなりました。11月にTシャツ工場へ学長が来て「こないだの幕張（「尽未来際－尽未来際－BRAHMAN 20th ANNIVERSARY」）に集まった人全員が買ってくれば、終わるんじゃない？」と笑いながら話してくれました。

まだ“山”が大きいく所でしたから、なんだか納得させられる言葉でしたね（笑）

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

とにかく圧倒的な量だったので、当初これを全てリユースとして販売しきれぬのか、いささか疑問でした。リユースTシャツは不良品としてみられるのではないかと、抵抗はないか、など不安は尽きませんでした。

しかし「Dappe Rock's」や「南阿蘇大復興祭」でリユースTシャツの販売を担当したとき、ネガティブなものではなく、考えを改めさせられました。中にはあえてダメージの激しいTシャツをお求めになるお客さんもいたほどでした。

——その際、うれしかった想いがあればお聞かせください。

中学生や高校生、お年寄りの方など、幡ヶ谷再生大学のことを一切知らなそうな方々に「格好いい!」「孫の分も!」と喜んで買っていただけたときはとにかくうれしかったです。そういう方々たちにも「ちゃんと届いている」と実感できました。

ほかにもライブ会場でリユースTシャツを着ている人を見かけ

ると、思わず笑みがこぼれ、心の中で誇っています。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

この“大学”がなかったら、とてもつまらない人生を過ごしていたと思います。口ばかりで何もしない人間になりかけていました。

「人間復興」は、本能的に的を射ていると思います。おかげさまで誇れる自分を構築でき、活動を通じて気持ちを共有できる仲間とも出会えました。自分自身が一番復興している実感があります。

これを読んでいる方で、もし幡再の活動に参加することを躊躇している方がいるならお勧めしたいですね。普通の社会人として働きながらもできることだと、これからも証明し続けていきたいと思っています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあれば、お聞かせください。

幡ヶ谷再生大学に…というより、自分を含め生徒の方々に對してですが、次に災害が起こったときに行動を起こせることを期待しています。日本で今後、災害はいつどこで起こるかわかりません。

いざというときのために、幡再本隊だけでなく、一人一人が率先して動けるようになってほしいと思います。大街道と小淵浜の公園、いわきの生木葉ファームさんやTシャツ工場の“自主練”は、地元の生徒たちの自発的な行動で誕生したのは、本当に素晴らしいです。

僕は、陸上部で愛知支部のリーダーを任せてもらっていますが、何かを運営していくのは大変なことだと思います。その苦労にも勝る大切な気持ちがあるからこそ、僕も自主練も続けることができるのでしょう。

——田邊さんが考える、幡再で活動していく上で必要不可欠なもの、はどのようなものでしょうか。

自分の中で二つあると思います。

一つ目は、人を労る心。

被災者の方々に對してはもちろんですが、一緒に活動をする人たちに對しても、同じ志をもった仲間ですので、大切にしたいと思っています。そこで繋がった仲間は、いつか力になってくれます。実際に僕も常総で出会った愛知県出身の仲間がいて、熊本地震の際には協力して物資を集め、送ることができました。

もう一つは、体力。

始めることは意外と簡単なのですが、継続することは困難です。行動を続けるためにも力は必要だと思います。体力をつけた方はぜひ、幡ヶ谷再生大学陸上部への入部をご検討ください(笑) 必要最低限の力は、5km 走ることから生まれると思います。強く優しく生きられる人たちが増えることを期待しています。そのために幡ヶ谷再生大学は、とても良いきっかけになると思っています。自分もまだまだ未熟者ですので、ともに頑張りましょう。——遠く愛知県から常総まで来るに至る原動力はどのようなものでしょうか？

もっと何かできないか、悔しいな、自分は無力かな、と思う気持ちやがはり心のどこかに常にあるからだと思います。結局、そうやって悩んでいても何も始まらないので。行動を起こさないで。

あと、僕は決してスティックではないです（笑）

僕の場合は、幡ヶ谷再生大学陸上部から始まりました。陸上部で培った体力は被災地で発揮しようと以前から思っていました。また幡再を通じて異なる現場でやることを次々と知ることができるので、自分ができる限りのことをやってみたい、という気持ちも生まれました。幡再の活動は、ときに思い悩むことはあっても、なんだかんだ毎回楽しんでやっていますからね。

とはいえ、自分は東京の実家を中継地点にできますので愛知

県から常総に向かうほかの方々より恵まれていると思います。関東で用事があるなら常総にも行こう、という気持ちになっています。

今年の勝田マラソン前日にも常総のブルーベリー畑の活動に参加していました。フルマラソン前日で、さすがにゆかりさんにも心配されましたが、その後のマラソンでは自己ベストを更新できました（笑）

それまで続けた行動の成果だと自負しております。

「自らが『自分ができることをできる範囲で作業する』

活動を通して出会った“新たな”仲間たち。彼女が感じた“それまでの”「被災地」と、「被災者」となった現状を、兄・石塚政弘さんとは異なる視点で話していただきました。

ともみ
茨城県出身



——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2015年の年末、若宮戸の自宅の復興作業中に「幡ヶ谷再生大学」という団体の方たちが水害の話を聞きたい」と伺っていました。当日、わらわら20人ほどの方がいらしたときの迫力ある雰囲気は「本当に大学生…？」と思いました（笑）

実際に知ったのは、自宅に活動に来てくださるようになってからで、生徒たちから活動内容などをお聞きしました。

TOSHI-LOWさんが震災の復興活動をしていることは、同じ茨城県出身者としてなんとなく知っている程度でしたが、今回の活動を通して、幡ヶ谷再生大学の学長であることが繋がりました。

——ご自身の自宅、若宮戸での活動で感じたことを教えてください。

今まで災害が起きたときは、被災地支援をしたいという思いはあっても、なかなか行動に移せずにいた自分にとって、今回は被災者という立場になってさまざまな経験を、学びました。多くの生徒たちに出会い、その行動力に“実際に現場を見ることの大切さ”を教えられました。

誰が作業を指示するわけでもなく、自らが「自分ができることをできる範囲で作業する」対応力も素晴らしいものでした。

2月の寒空の下、100人近くの生徒が一斉に集まって、庭の地べたに座っての炊き出しはおしかったです！ そのときBRAHMANのRONZIさんが特製のラーメンを作ってくださり、冷え切った身体に沁みわたりました。

5月の活動ファイナルのときも、BBQや熊本からのトウモロコシ、トマトなどの差し入れは、被災地域が「食」を通して、「人」と「人」とで繋ぐお昼ごはんになったのは感慨深いものでした。“同じ釜の飯を食う”ではないですが、同じ大変な作業を共にし、地元の食材を共に食することは、素敵なことだと思いました。

若宮戸の作業は体力勝負でしたので、食事は大事なエネルギー源だったと思います。

——幡ヶ谷再生大学で印象に残っている生徒がいいたら教えてください。

真冬の屋外作業にもかかわらずTシャツ姿だったり、本職の方もいましたが、職人のように石堀を見事に積み直したり、慣れない一輪車をふらつきながらも何度も往復して土を運んでくれたり、ORANGE RANGEのYOHさんのシャベルを持つ姿も貴重でした。

女性陣は土の積みなど、力仕事を汗だくに、そして泥だらけになりながらも、女子力高くオシャレに作業してくださり、男性陣顔負けのたくましい姿には「女の底力」を感じました（笑）

私自身は、我が家の記録係として生徒たちを見守っていましたが、みなさん個性的で見るに飽きることのない、魅力的な方たちばかりでした。

——幡ヶ谷再生大学の活動を通して、うれしかったことを教えてください。

水害当初は、被害の大きさや生活再建の見通しが立たない状況に落ち込んでいた部分もありました。ですが、各地から「常総市」という観光地でもない土地に何度も足を運んでくれたことが、何よりうれしく感謝しています。

生徒のみなさんが、地元以上に良いところを発見してくれて、私自身もこの街がより好きになりました。

——幡ヶ谷再生大学の活動を通し、嫌な経験がありましたら教えてください。

幡ヶ谷再生大学のみなさんには、特にありません。

——仲良くなった生徒たちと、ライブやフェスなどに出席しているとお聞きしました。その交流は特別なものですか？

もともと私も音楽やライブが好きでしたので、ジャンルは違えど、幡ヶ谷再生大学のみなさんも音楽好きな方が多かったもので、自然と活動中の合間に音楽の話をするようになりました。

特に、学長や幡ヶ谷再生大学に縁のあるアーティストの話になると、もう止まらないんです（笑）

「被災者」と「ボランティア」の垣根を越えて、今では一緒に

楽しみながら騒げる大切な“仲間”になっています。

——若宮戸とTシャツ工場は、同時進行でボランティア活動をおこなっていました。Tシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

しばらくは自宅の修繕ばかりで、ほかの地区を見ていませんでした。すでに半年以上経過した状況でのTシャツ工場の光景は、絶句でした。常総市の被害は、広範囲に及んだため、被災状況もさまざまで、若宮戸とは違った現場に戸惑いもありました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

「Dappe Rock's」のときに、リユースTシャツを販売する生徒として参加しました。そこでは、あえて「ダメージのあるTシャツがカッコイイ」と言い求めている方がたくさんいました。「商品」に対する背景や、携わる人々の想いがあれば、廃棄されるはずのリユースTシャツでも価値のある逸品に変わって思っています。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

ボランティア活動が少なくなってきたころに、幡ヶ谷再生大学の多くの人員投入と、長期的なサポートに大変勇気づけられ、励まされました。

生徒のみなさんは、とにかく明るくエネルギーで、元気

東北ライブハウス大作戦によってできた「LIVEHOUSE FREAKS OFUNATO」は、2016年10月29日に仮設商店街での営業終了し、移転します。再開は来春以降、大船渡市が展開する津波復興拠点整備事業によりJR大船渡駅周辺に造り上げる「新しい街」の一角です。新生FREAKSの防音材に、幡再生のアイデアから常総の水没した廃棄Tシャツを使うことになりました。常総で続けてきた洗濯して、干して、取り込んで、たたむ作業をおこないました。被災地からゴミを出さない工夫と努力。被災地を繋ぎ、想いを繋ぐ、幡再ならではの活動になりました。

「考えて行動」

東北ライブハウス大作戦大船渡支部「LIVEHOUSE FREAKS OFUNATO」勤務の千葉さん（東北ライブハウス大作戦大船渡支部長）にとってリユースTシャツは、どんな存在か。「常総での活動を現地」という活動の作業場は、千葉さんのご自宅でおこなわれ、その日の作業はどんなものだったのか。当日に感じたこと、被災地と被災地の繋がりを聞きました。

千葉裕昭
岩手県出身



——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

2012年の「KESON ROCK FESTIVAL」のアーティストサインボー

をもらいました！

どんな作業も楽しくする前向きな遊び心には、自然と笑顔になり、癒やされました。幡再としての若宮戸の活動は一旦終わりましたが、今でも自主練などで生徒たちと交流があり、その繋がりに感謝します。

出身や職業、年齢もさまざまですが、同志のような素敵な仲間ですね。今の私の役割としては、このような活動があることや、人々の輪や緑を発信すること、水害をマイナスに捉えることなく、プラスに転じて「再興」を“最高”のものにしていることだと思っています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

その発信力と熱く団結力のある生徒の集まりなので、「その後」の被災地支援を中長期的なサポートで見守っていただきたいです。今までの自分自身にも当てはまることですが、ニュースや新聞など報道がされなくなると、勝手に復興されたと思っていました。

水害から1年以上経っても、復興途上である現状を、現実で見ている今、ほかの被災地も容易に想像できます。

“忘れない”ことで「再建」から「防災」へ、お互いの意識向上につながる活動を期待しています。

ドに「幡ヶ谷再生大学」の名前があって…。「何だろう？」と調べたのが最初だったと思います。

——今回、「LIVEHOUSE FREAKS」に常総の廃棄Tシャツが防音のため壁などに詰ると聞いたときの経緯を教えてください。

西片さん（東北ライブハウス大作戦本部長）から、「幡再から廃棄Tシャツを使った防音の話があるんだけど、ゆかりさんの話を聞いてみてよ」と連絡がありました。2016年の「ARABAKI ROCK FEST.16」で幡ヶ谷再生大学のゆかりさんから「被災地と被災地をこういった形で繋がれるといいよね」とお話し、共感しました。

——すぐに実行に移そうと思いましたが？

「LIVEHOUSE FREAKS」が以前あった店舗でも、布団や畳を使って防音をしていたので、イメージはできていました。

それとは別に「防音壁に常総の廃棄Tシャツを使って防音する」という発想は、常総の幡再スタッフの方の提案、ということに驚かされました。

——廃棄されるTシャツもあれば、防音材のように使われるTシャツ、また「リユースTシャツ」として商品として世に出ていくTシャツもあります。どんな思いで見えておりますか？

とにかく「すごいな」と感じます。買ってくれる方たちがその意味をちゃんと理解していることも素晴らしいことだと思います。

——今回の活動を通して、嬉しかった思い出があればお聞かせ

「自分たちでも何かできないか」

リユースTシャツのプロジェクトに心打たれ、自身でも「チームゴジャッペ」を立ち上げた三橋さん。チーム立ち上げと現在を訊きました。

三橋孝裕
茨城県出身

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

学長（TOSHI-LOW）と同じ地元でして、やはり3.11がきっかけです。

——常総の被害を受けたTシャツ工場の「Tシャツの山」を見たときの感想を教えてください。

いったい何十トン、何百トンあるのだろうと…。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

ライブ会場などでよく見かけるようになったので、知らない方にリユースTを少しでも知ってもらいたいですね。一枚一枚に個性があって、すごくカッコイイと思いますので。

——リユースTシャツを用いて、ご自身でも活動をされているとお聞きました。

活動に参加させていただいて「自分たちでも何かできないか」と考え「チームゴジャッペ」という名で、リユースTシャツの販売をさせていただいております。

お客さんに説明し、「ぜひともほしい」といった声を聞いたとき「リユースの味があっていいじゃん！」といったご意見をいただいたときや、賛同してもらえる方が現れたときは、繋が

ぐたい。

一つのきっかけから、人と人、食と食、いろんな想いが繋がる瞬間を、自宅で体験できたのはうれしかったです。

——幡ヶ谷再生大学を通して、変わったことなどあれば教えてください。

今回ゆかりさんという連絡している中で、ちょっとした考え方や行動が、分かっているようで分かってなかった部分に気づかせていただきました。

とにかく「考えて行動」がモットーになりました。



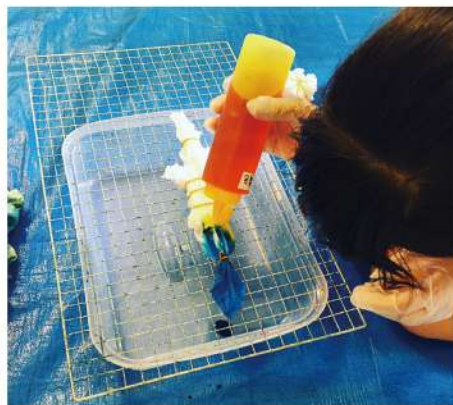
りを感じ、同時にうれしく思いますね。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

いろいろな被災地のボランティアや復興支援のプロジェクトを、忙しい中でも活動されているみなさんの姿に尊敬させられます。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今後も、復興支援のために尽力してほしいです。その行動に心打たれ、私のように動き出す人間もいますので。



薄い色のTシャツもなかなかないかと話していて、「汚れが落ちないのなら、染めてしまえば…」と思いつきました。

——逆転の発想ですね。

そうなりますね（笑）そのことをゆかりさんに相談し、タイダイ職人の方を紹介していただきました。

最初は、動いている施設の利用者さまとタイダイ染めをやる予定でしたが、幡ヶ谷再生大学のみんなと話しているうちに、いろんな人に来てもらえるように「ワークショップもやってみよう」ということになりました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出ていくことの感慨などあれば教えてください。

Tシャツとしてだけではなく、形を変えてもリユースされていて、とても素晴らしいと思います。一枚でも多く再生してほしいです。そして、その作業に自分も関わったことをうれしく思っています。

——幡ヶ谷再生大学でおこなった活動はその後、自主練と称し、有志で集まり活動を行っています。山口さんの起こした行動は、その一歩になりそうですか？

そうなってほしいです。ワークショップに来て幡再の活動を知り、興味をもってくれた方々がいました。そこから活動に参加してくれる人が増えたらうれしいです。

「魂というか、気持ちがああのTシャツの山には存在する」

ORANGE RANGEのボーカルとして活躍するHIROKIさんは福島県いわき市にある生木葉ファームの活動に続き、今回の常総での活動にも参加していただきました。リユースTシャツと今後の幡ヶ谷再生大学について率直な想いを訊きました。

HIROKI
ORANGE RANGE

——幡ヶ谷再生大学との出会いを教えてください。

バンドメンバーであるYOHが個人的に幡再で活動をしているので、紹介してもらい、バンド全体でも携わるようになりました。

——HIROKIさんは、ほかのメンバーと共に生木葉、常総と足を運ばれています。動機はどのようなものだったのでしょうか？

東日本大震災以降、ボランティアと呼べるほど立派なことは

自主練でも、作業の合間にタイダイ染めができたら楽しいのでは、とも思っています。それが実現できるように準備をしていきたいです。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いなどあればお聞かせください。

「自分で考えて行動すること」、そして「継続していくこと」という、とても大事なことを教えてもらいました。初めて活動に参加した帰りに「今まではそうじゃなかったな」と考えさせられました。

考えて行動して、続けていかないと「何もできない人になってしまうんじゃないか」と思いました。それからは「自分で考えて行動すること」を念頭においています。

この活動を通して人との繋がりの大切さも再確認できましたし、会いたい人たちが増えました。自主練や活動に参加できないと寂しいし、参加して会えると一緒に楽しく過ごせています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

何かあったときにすぐに行動してくれて、知らなかったことを学べる幡再は心強い存在です。これからも活動を続けてほしいです。そして、できる限りこの活動に参加していきます。

——読者に一言お願い致します。

ゆかりさんをはじめ、幡再のTwitterを見てワークショップに来てくれた方、工場と一緒に作業した幡再生、常総のことを知って、仙台から来てくれた友達。行けないけどSNSで知らせてくれた友達。本当にうれしかったです。

こうやって人との繋がりができる場所は、ほかにはないと思います。

また、活動に参加するたびに感じるものがたくさんあります。

それは必ず自分にとってプラスになっています。興味があるけど参加することを迷っていたら、思いきって参加してみてください。

きっと素晴らしい1日になると思います。





こんなに大量のTシャツがあるのか…」と思いました。果てしない作業だな、と感じました。

——廃棄されるはずのTシャツが「リユースTシャツ」として世に出していくことの感慨などあれば教えてください。

再利用の動機として、廃棄にかかる経済的な負担ももちろんあったと思います。単純に、魂というか、気持ちがあのTシャツの山には存在する、と感じました。それを「殺さずに生かしていく」というのは良いことだと思っていました。

——2016年、ORANGE RANGEのツアーTシャツにリユース

スTシャツを使っていたいただきました。どなたの発案だったのでしょうか？ また、託したいなどあれば教えてください。

YOHの提案です。自分らにできることを、無理せずやれる範囲でやろうという話をしました。僕らのライブに遊びに来る人のなかにも、時間的な問題や経済的な余裕がなくて何もしてあげられない、って考えている人はたくさんいると思うんですよね。

物販にあるTシャツを買うだけで参加した気持ちになってもらえれば僕らもうれしいですし、購入しなくても「こういう地域があって、こういう活動をしている団体がいるんだ」と知って、考えるきっかけを生むだけでも意味はあるんじゃないかなって思います。

——リユースTシャツに関わったすべてのことで、うれしかったことがあればお聞かせください。

作業の合間に、タダでお茶が飲めて、お菓子が食べられることです（笑）

そして、でき上がったTシャツを着ている人を目撃したときは、やはりうれしいです。

——幡ヶ谷再生大学に対する想い、期待することがあればお聞かせください。

個人的には「誰かのために」は、誰かのためになっていないと思うし、「自分のために」って気持ちですべての行動をしているので、自分のペースでさまざまな活動が続けられたらと思います。

幡再はそんな人たちが自由に出入りできる場所であってほしいです。

あと、「沖縄そば部」があれば入部したいです（笑）

トーキョータナカ
MAN WITH A MISSION

「単純ニヤレルコトヲヤレル範囲デ」

日本のみならず、世界にも活躍の場を広げているMAN WITH A MISSIONのボーカル・トーキョータナカさん。多忙な時間を割いて、かねてより幡ヶ谷再生大学の活動には多角的にご協力いただいています。今回は、常総での活動をメインに（通訳を通して）話していただきました。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

「tactics records（BRAHMAN/OAUが所属するレーベル）」ノTwitterで小淵浜公園ノ活動ヲ知り、小淵二行ッて色々聞カセテモライマシタ。

——2015年9月、水害が起こったときの心境を教えてください。

水害ノ直後ハ「被害ガ酷クナケレバ良イナ」トシカ思イマセンデシタガ、数日後ニハ常総市ノボランティアセンターデノ活動ニ参加サセテイタダキマシタ。

——最初に幡ヶ谷再生大学のメンバーのどなたと連絡を取り合いましたか？

最初ハ、ユカリサンダッタ思イマス。

——連絡を取ったのはなぜ、ゆかりだったのですか？

現場デノ活動ノスペテヲ把握シテイルノハ、ユカリサンダッテイルカラカナ？

——今回、工場に複数台洗濯機を寄付していただくなど、多大な支援をしていただきました。トーキョータナカさんはなぜ、そこまでの支援していただいたのでしょうか。

逆ニ作業ニ参加デキナイブン、必要性ノアル洗濯機ヲ支援スルコトハ、自分ニデキルコトダッタノデ。ソレダケデス。

——トーキョータナカさんにとってリユースTシャツはどんな存在ですか？

リユースTシャツガドウノコウノトイウ思イハ、アマリナイデス（笑）

タマタマオ手伝イサセテイタダイタ支援ガリユースTシャツダッタ、ッテコトデス。最終的ニハ、コノリユースTシャツヲ完売サセテ、工場二次ノステップニ向カッテ欲シイ、トイウ考エニハナリマシタ。

——トーキョータナカさんは幡ヶ谷再生大学の全活動を通じて、多忙ながら顔を出していただいています。その原動力はどこから来るのでしょうか？

単純ニヤレルコトヲヤレル範囲デ、ッテイウ自分ナリノ考エカラデス。

MAN WITH A MISSIONノメンバーモ、ソノ想イニハ賛同シ、協力シテクレテイマシ。我々が発信スルカラコソノ支援ノ拡散トイウ観点カラモ、ヤレルコトハヤリタイト思ッテ動イテイマス。

——幡ヶ谷再生大学の活動を通じて、うれしかった思いがあればお聞かせください。

幡再ノオ手伝イサセテイタダクウチニ、我々ノ音楽モ抵抗ナク聞イテクダサル方々ガ増エタッテコトデスカネ？

ブッチャケ、怖い先輩バンドマンノ方々モ優シシテクレルヨウニナリマシタ（笑）

——印象に残っている“生徒”はいましたか？

幡再ノ小淵デノ活動ヤ常総デノ活動時ノTwitterナドデ我々ノバンドTヲ着テ参加シテクレテイル子供たちヲ見カケルコトガアリマシタ。



ソレハ本当ニ嬉シカッタデス。

——幡ヶ谷再生大学の活動を通して、様々な経験がありましたら教えてください。

嫌ナコトハ忘れルヨウニシテイルノデ、別ニナイデス（笑）

——トーキョータナカさんにとって、「Dappe Rock's」はどんなイベントでしたか？

被災地ニユカリノアルバンドマンたちガ被災地ヲ想イ、自分たちガ得意トスル音楽デ被災地ヲ盛り上ゲル。ソナドストリートナイイベントガ無料デ開催デキタ、今マデニ類ヲ見ナイ最高ナイイベントダッタ思イマス。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

タダ南タト被災地ヤ困ッテイル方々ノソバデ寄り添ッテイルヨウナ今マデト変ワラヌ活動ヲ！ デスカネ（笑）

——読者に一言お願いします。

是非一度、幡再ノボランティア活動ニ参加シテ、自分ニデモデキルコトヲ感じテホシト思イマス。

雖シイコトデハナイノデ！

ガンバッペシ日本！！





【第1回公開講座】

戦後70周年にあたる2015年8月9日、幡ヶ谷再生大学はATSUKOBAROUH arts drinks talk (東京・渋谷区)にて「戦争体験者の話を聞く」というテーマで第1回公開講座を開催しました。

講師の青木重夫さん(日本画家)からは戦争への道のり、戦時下の生活から現在、そして未来につながる話を当時の教科書や戦遺品などとともにその時代を生きた当事者の目線や体験を通してお話いただき、戦争を知らない我々世代にとって初めて見聞きすることの多い講義となりました。

【第2回公開講座】

9月14日、2015年7月に安倍首相自身が「国民の理解が進んでいない」というなか、安保法制(正式には平和安全法制整備法案)が衆議院本会議で可決され、この法案に対して多くの憲法学者から、憲法違反の声が上がりました。

何が憲法違反なのか、そもそも憲法とは何か、をテーマにSHIBAURA HOUSE(東京・港区)にて「明日の自由を守る若手弁護士の会」から弁護士・青龍美和子さんをお迎えし、憲法への理解を深めました。



【第3回公開講座】

10月25日、東北の原発「福島、女川、六ヶ所に住む方の話を聞く」をテーマに宮城県・石巻市にて公開講座を行いました。

原発立地町村に住む人にとって、原発は単純な話ではありません。この日の会場から女川原発まで直線距離にして約9km。

そんな場所で、事故があり被害を受けた福島、そして震災で事故にはならず再稼働に向けて積極的な女川、日本の原子力システムを根底から支える六ヶ所、そこに住む方の声を聴き、みんなで考える場になりました。



【第4回公開講座】

2016年12月10日、「チェルノブイリ原発事故30周年の今年、フクシマを考える」をテーマにATSUKOBAROUH arts drinks talk (東京・渋谷区)にて公開講座を行いました。

会場のアツコバルーさんは第1回目の公開講座でもお世話になり、今回は展示中の井上洋介さんのご遺族の方のご厚意をいただき開催。東京大空襲を体験し、絵画と向き合い続けた井上洋介さんの作品展示のなかでの第4回目の公開講座になりました。

今年原発事故から30年を迎えたチェルノブイリでは、事故のあった4号炉を覆う新しい石棺が完成し、いまだ続く事故処理。

チェルノブイリの現場に何度も足を運び、現地の方と交流し医療支援を続けながら福島にも携わる広島出身・在住のロシア語医療通訳の山田英雄さんをお迎えしました。山田さん自身広島原爆被爆2世ということもあり、広島から続く世界の原発、原爆の核の歴史や被爆についての話も交えながら、チェルノブイリの実情から福島につながる話をさせていただきました。



「人として人をどう支えていくのか、
人としてどうあるべきか」

ブーヴィエ・マリーナ・ナギサ・リーズ
福岡県出身

幡ヶ谷再生大学公開講座の第1回の会場となった「アツコバルー ATSUKOBAROUH arts drinks talk L'AMUSEE-ラミュゼ」に勤務する、ナギサさん。アート作品を主に扱う「アツコバルー」で感じる日本のアートの現状と、幡ヶ谷再生大学への期待について訊きました。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

「UP LINK(渋谷に居を構える映画配給会社)」の倉持さんの紹介で知りました。

——2015年8月におこなわれた第1回幡ヶ谷再生大学公開講座で思い出に残っていることがあれば教えてください。

昨今では、聞く機会が減ってきている戦争体験者の話を聞くというのは本当に貴重な機会だったと思います。

——その際、思い出に残るエピソードがあればお聞かせください。

アツコバルーを知らないお客様に来ていただいたことです。

——2015年8月、多くの展示物がアツコバルーにはあったのを覚えています。日本のアートの現状を教えてください。

外国に比べ、日本には「アートのマーケット」は皆無に等しいと思います。また、コレクターもとても少ないため、作品はあまり売れないというのが、日本のアートの現状だと思います。

——「アツコバルー ATSUKOBAROUH arts drinks talk L'AMUSEE-ラミュゼ」の名前に感銘を受けた理由をお聞かせください。

「アツコバルー」はオーナー、アツコバルーさんの名前です。「arts」アートを見ながら、「drinks」お酒やコーヒーを飲んで、「talk」コミュニケーションをとる、という趣旨です。

作品を売りたいのはやまやまですが、今の日本では、まずは作品を見て感じて知ってもらうことが大事だと思います。まずは、リラックスして作品と向き合いアートについてお話をする空間、アートを身近に感じてもらえる空間を提供できたらと思っています。

それから、次のステップとして作品を買って持って帰っていただく楽しさを知ってもらえたらと思います。

——幡ヶ谷再生大学の活動について、どのように感じておられますか。

幡ヶ谷再生大学は、人間レベルでの活動が本当に魅力的だと思います。

震災があると現地に出向き、現場での支援活動がメインなので、人として人をどう支えていくのか、人としてどうあるべきかを、現場で体験し、発信し、伝えていく、とても強い団体だと思っています。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

これからガングラン活動して、次の世代に「本当に大切なことは何か」を伝えていってほしいと思います。





2016年2月14日に沖縄県にて「幡ヶ谷再生大学 復興再生部 Sakurazaka ASYLUM 特別公開講座」が開催されました。小渕浜、いわき、常総で一緒に動く地元の方と幡再の活動に尽力して頂いているアーティストたちが登壇し、「幡再とは？」を話しました。翌日には辺野古、じんぶん学校、高江を訪問しました。幡ヶ谷再生大学と沖縄への架け橋となった村重さん、じんぶん学校を運営する奥石さん、その場所で働く島袋さん、高江のお住まいのアーティスト・石原さんにインタビューをおこないました。



「小さくてもいいんです。なにができるか考えて動きましょう」

ミュージシャンとして活動する石原さんにとって、米軍ヘリパッド移設問題で揺れる沖縄県・高江とはどんなところか。幡ヶ谷再生大学へ期待するもの、日本と沖縄のおかれている現状を聞きました。

石原 岳さん
兵庫県出身

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

年に一回、那覇で開催されている「Sakurazaka ASYLUM」という街フェスで存在を知りました。

——幡ヶ谷再生大学のゆかりが連れてきた人たちの中で、印象に残っている方はいましたか？

やっぱりミュージシャンの方々が高江に来てくれて嬉しかったですね。「ウチナアンチュ」であるORANGE RANGEのYOHくんが、いま沖縄で起こっていることに触れてくれたことが印象に残っています。

沖縄でも高江のことは新聞やニュースの字面でしか知らないという人、興味の少ない人は大勢いますから。

——いつごろから高江にお住まいなのでしょう？

1992年から沖縄に住んでいます。高江には那覇から移り住んで2006年3月から住んでいます。出稼ぎ仕事で東京に行くこともあるし、演奏でツアーに行くこともありますが、住居は高江です。

——高江に住むことを決めた動機、またはその魅力を教えてください。

高江に住む友人の家にいったときに、朝、目を覚ますと庭から山々が雄大に見えて、川のせせざりや虫や鳥の声でいっぱいでした。街で暮らしてきた自分には自然が圧倒的でした。その友人に「子育てをするなら、街じゃなくてやんばろがいいよ」と誘われて那覇から高江に引っ越ししました。

——米軍基地移設問題を抱える辺野古や高江を通して伝えたいことがありましたら教えてください。

見てください。来てください。感じてください。助けてください。

——高江に在住し、辛かった経験がありましたら教えてください。

市民運動や住民運動のようなことをしたことなかった私が、高江に引っ越して高江に住む友人たちと座り込みということをやりはじめて、あっという間に10年近く経ちました。

今でもそうですが、すべてが手探りです。辛かったり、大変だったり、いろいろありましたけど、それによって成長させられているので「ギフト」だと思っています。具体的に辛いことはすぐ忘れてしまうのでバツと出てこないですね。

——辺野古や高江を通し、うれしかった想いがあればお聞かせください。

「静かな森で子育てを」と思って高江に住んだら、ジャストタイミングで静かどころか日本でも屈指のエッジの効いたところに来てしまったわけです…。

沖縄県内でもまったく知られていなかった高江で起こっていることを「知ってほしい」と発信し続けていると、いろいろな出会いがありました。勝井祐二、坂田明、遠藤ミチロウ、七尾旅人など、さまざまな素晴らしい演奏家と出会えたことは、私にとってはすごくうれしいことです。

そして、それ以外にもたくさんの素敵な人たちの出会いが、私にとって宝です。

——幡ヶ谷再生大学の活動はご存じでしょうか。

じつは幡ヶ谷再生大学については、あまりよく知らないんです…。鬼怒川水害で行動されていることぐらいしか…。すみません。水害によって、ナチュラルタイダイになったシャツを那覇で販売しているのを見たときに、復旧支援のアイデアがとても素晴らしいなと思いました。

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

実際に行動を起こす人が少ない日本の現状で動いている。

それだけで希望ですね。

——混沌とする沖縄、日本ですが、何か思うことがあればお聞かせください。

なんとも一言では言えないですね。

日本も沖縄も時間や世代を重ねて、どんどん変質していつか、沖縄で起こっていることは対岸の火事ではなく、同じようなことが日本でも起こっています。

沖縄の問題に触れることによって、日本が持つ問題に触れることになると思います。日米合同委員会という日本の全庁の官僚と在日米軍の軍人の会議が、在日米軍が日本の中でどうしていくか、辺野古や高江をどう扱っていくか、などなどのすべてを決めています。

だいたい他国の軍に首都の制空権を握られている独立国家なんてありません。沖縄だけでなく、日本はまだ完全にアメリカの占領下にあります。

——現代を生きる我々に伝えたいことがあればお願いします。

私たちの日常で政治的アクションができる瞬間は、たとえば選挙における投票です。それ以外でアクションっていうと…自分の選挙区の議員に、問題と思われることについて、議会で動いてもらうように働きかける。

議会で陳情書を出す。議会で傍聴する。勉強会を開くなど、たくさんあります。どれも大変ですが、いろいろ思いつくこと

ならなんでもいいし、楽しくやれば楽しくできるんです。

実は、もはや投票日しか政治的アクションをしないということでは、なにもかも、すべてが間に合わないし、追いつかない。それが今の日本だと思うんです。

わかりにくいからといって「肉屋を支持する豚」のように暮らしては、やがて精肉されるだけです。政治と暮らしは表裏一体です。

たとえるなら「自分、サッカーは好きですけど、政治にはあまり興味ないんです」は、「自分、サッカーは好きですけど、自分の暮らしと生きることに、あんまり興味ないっす。どう

でもいいっす。」と言っているのと同じように感じています。

それでは本当にににも解決していかない。小さくてもいいんです。なにができるかを考えて動きましょう。目に見える現象として分かりやすいので、一度、沖縄の辺野古で、高江で、なにが起こっているか見にきてください。

あなたの日常についてのヒントがあるかもしれません。

——読者に一言お願いします。

あなたの見ている風景が、最高の景色だろうと残酷で最悪の景色だろうとあなたの鏡です。あなたを写しています。死ぬまで生きましょう。

村重光敏さん
福島県出身

「これからどうやって生きていこう？」

福島在住デュオ「ミーフムーラ」として活動し、沖縄へは年に数回通う村重さん。
2011年の東日本大震災後、妻子のみ沖縄県へ移住した村重さんにとっての「沖縄」と「じんぶん学校」について話を聞きました。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

「STEP in FUKUSHIMA」というイベントの際、幡再のブースを拝見したのがきっかけでした。

——2016年2月におこなわれた沖縄の街フェス「Sakurazaka ASYLUM 2016」沖縄公演について、思うことがあれば教えてください。

2011年の東日本大震災後からほぼ毎年、参加させていただいております。まだまだ知らない沖縄の姿を、そこに生活しておられる方々を通じて、感じ取りたいと思っています。微力ながら沖縄県の素晴らしさを発信できれば、と考えております。

——村重さんにとって、沖縄県はどんな場所ですか？

読みかじりの沖縄史で知り得た知識ではありますが、「私のようないい加減な人間がウキウキ行てはいけな場所」と勝手に思い込み、妻子が避難を決めるまで沖縄には行ったことがありませんでした。

現在では、妻子や友人、友達に住む大切な場所になっています。勝手ながら「心の故郷」にしています。

——沖縄発のドキュメンタリー映画などでメガホンを取る興石正監督と交流があり、「じんぶん学校（沖縄の大自然に触れ合い“生きる”喜びや豊かさを学ぶエコツアー）」もその流れとお聞きしました。

3.11の東日本大震災から約1週間後の2011年3月19日、興石監督に私と家族を「じんぶん学校」に連れて行っていただきました。当時は、まだ映画監督をしていらっしゃるとは知りませんでした。

はじまりは、私たち家族の安否を気遣っていただいた、沖縄のミュージシャン・知念良吉さんの一本の電話からでした。私は、原発事故の危機が日に日に迫っているなか、小学校1年生だった息子を被曝から遠ざけたい一心で知念さんに「沖縄に避難したい」と言っていました。

知念さんは「名護の知り合いに受け入れ可能か聞いてみます」と言ってくださり、その「名護の知り合い」が興石監督でした。

名護での避難生活2日目、私たち家族は監督に連れられ、じんぶん学校へつづく森の中の山道を歩いていました。

まるで、生命が爆発したかのようなヤンバルの森は、聴ききれない鳥や虫の声であふれ、触れたことのない木々や葉は物凄い精気を放ち、私たちを拒んでいるかのように生い茂っていました。

そんな森の山道をゆっくりくぐっていくと、眼前に信じられないほどの青と緑色のサンゴ礁の海が広がっており、しばらくは動けなかったのをよく覚えています。

この風景を沖縄のおじい、おばあは「懐かしい」とよく言うそうです。

興石監督にじんぶん学校を案内してもらいながらも「これからどうやって生きていこう…」という思いが頭から離れませんでした。

そんな鬱屈した気分、サンゴ礁が広がる浜辺に寝そべり、息子が海に向かって投げている石の行く先を「ボー」と眺めていると、唐突に「好きなことをすればいい」という言葉が聞こえたように感じました。

空耳だと思いましたが、元気のなかった息子が次第に元気を取り戻してゆく姿を見ていると不思議にも「何とかかなる」と思えてきました。

そういった意味でもじんぶん学校は、私の沖縄での原点なんです。



——「じんぶん学校」に行ったのは、あの日で何回目でしたか？

当初は「記念に」と行った回数を息子と競って数えていたが、あれから約6年。毎年3〜4回は家族に会いに沖縄に行くようになり、そのたびに釣りや、作業の手伝い、ライブで頻繁に行くようになり、息子も私も数えるのをあきらめました(笑)

——みんなで行った「じんぶん学校」はどんな思い出が残っていますか？

曇天の空の下、みんなが完全に寝不足なうえに、沖縄とは思えないほど寒い日で凍えていたのを覚えています。どう見ても愚連隊のような連中が、興石監督のお話をしっかり真面目に聴いていましたね(笑)

みんなで食べた昼食の、手づくりゆい豆腐、ジュース、パイア炒め人参しりしりがムチャクチャおいしかった。

学長(＝TOSHI-LOW)がパイアパイの収穫に挑戦して、結局その道具を無残に破壊してしまい「俺は何でも壊すからな」と自慢げに言っていました(笑)

うちのミフ(冊子Vol.5菅原ミフ)が、白化したバカでかいヒトデを細かくんに「持って帰ります？」と聞いたら、普段とても優しい細美くんがメチャメチャ嫌そうな顔で「いらない」と言っていた(笑)

また「愚連隊たち」と行ってみたい、と思う楽しい思い出が残っています。

——その際、嬉しかった思い出があればお聞かせください。

学長が誰に聞かせるわけでもなく「良いとこだな…」とボソッと言ったんです。「じんぶん学校」は、私の沖縄での原点です。

「『エコネット・美』の立ち上げに関わった大人たちの姿が重なるように感じています」

「じんぶん学校」を訪れた際、案内をしていただいた島袋さん。幡ヶ谷再生大学との出会いと「じんぶん学校」への想いを聞きました。

島袋アンナさん
東京都出身・
現沖縄県在住

——いつごろから「じんぶん学校」でお仕事をされているのでしょうか？

大学3年のころからガイドの手伝いをはじめました。

——その魅力を教えてください。

名護市では1997年に海上米軍基地建設の是非を問う住民投票があったのですが、当時反対運動に深く関わっていた地元の大人たちが「反対」と言っているばかりでは、飯は食っていけない。

地元の自然や暮らしを守りながら、その魅力や大切さを伝え、経済的に自立していける基盤をつくるために「エコツアー」をスタートさせよう！という流れになり、1998年に「エコネット・美」(※以後「ちゅら」)を立ち上げました。

現在は「じんぶん学校」を運営する会社です。

当時、基地を受け入れることで、地域が経済的に潤うという理由から賛成の声をあげる住民が多かったなかで、「ちゅら」立ち上げメンバーたちは「先人たちが命をかけて守り残してくれた自然や暮らし、その中から生まれた“じんぶん”(生きるための知恵)こそが、子や孫に残していくべき財産だ」と、足も

たから何よりもうれしかった。

——村重さんにとって、幡ヶ谷再生大学はどのように見えていますか？

謎だらけで何も見えていませんが、一見閉塞的で困難な状況であっても、ユーモアとセンスで突破口を見出し、気がつけば笑いと活気に満ちているということをしている、と感じています。

ただ、私たち東北の人間は、人知れず大変お世話になっているのは、確かなことです。

——幡ヶ谷再生大学に対する想いがあればお聞かせください。

いわき市の生木葉ファームにて、私たち「ミーフムーラ」は活動に参加しては、昼食を食っては帰る、という暴挙を繰り返した挙句の果てに「またお昼食べに来てえ」と言われ、複雑な気持ちにさせられます(笑)

沖縄と越谷ASYLUMでの幡再トークセッションで、もっと相應しい方々がいるのにマイクを持たされたり、沖縄のステージと一緒に登壇した学長に「酔っ払いがしゃべってんじゃねえ」と大勢の前で罵倒されたり、気がつけば、この冊子に掲載されたり…。

逃げ出したいことも多々ありますが、小淵の牡蠣は最高だし、生木葉ファームの野菜はいつでも食べたいし、じんぶん学校でライブもしたいし、ゆかりさんのお願いを断れる気がしなかったり、と大変複雑な想いでおります(笑)

——今後、幡ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

今後も幡再でおいしいものも食べたいし、お役に立てることがあるかも知れませんが、どうか私たち「ミーフムーラ」と「内郷げんこつ会」を見捨てないでください(笑)

とある豊かさ丁寧に向きあう作業を続けていました。

来る日も来る日も石を運び、木をかつぎ、土をこねて、「じんぶん学校」へと続く森の道をつくり、小屋を建て、カマドを作っていました。気が遠くなるほど難儀な仕事を、機械を使わずにひたすら手でやっていました。

何かと戦う姿勢ではなく、楽しく、情熱と愛情をもって汗を流して働く大人の姿がかっこよくて、私もこんな大人と一緒に働いて学びたいと思うようになりました。

——その際、うれしかった思い出があればお聞かせください。

自分が育った地域の自然やくらしの豊かさにあらためて気づくことができたのは、とてもうれしいことでした。貴重な動植物とつながることで成り立っている私たちの毎日は、とても恵まれているなと感じています。

——幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

数年前のあるとき、ミーフムーラの村重さんが、たまたま同じときに沖縄を訪れていたゆかりさんを「じんぶん学校」に連れてきてくれたのが、幡ヶ谷再生大学を知ったきっかけでした。



——ゆかりが「じんぶん学校」に連れてきた方々のなかで、印象に残っている方はいましたか？

2016年の2月にご案内したみなさんも、夏前にいらした片平里菜さんたちも印象に残っています。2月では、前日のライブで疲れのなか、ヌーファのようなところまで来てくださって、じいじのお話も聞いていただけて、とてもありがたかったです。

最初は、みなさんの着ているものが真っ黒だったので、ちょっとびっくりしました（笑）

里菜さんたちには、ヌーファの夜も味わってもらえてよかったです。海もご案内できて、うれしい時間でした。

——「じんぶん学校」を通してうれしかった経験がありましたら教えてください。

ステキな出会いがたくさんあることが、なによりうれしいです。0歳のあちゃんから90代のおじいちゃんまで、この場所を訪れてくれるたくさんの人たちとの出会い。森や川や浜や海、自然のなかに暮らすたくさんの方の生きものたちとの出会い。やんばるの先人たちが残してくれた“じんぶん”との出会い。自然



のなかで育まれ少しずつ成長する自分自身との出会い。など書ききれないですね。

——今後、帽ヶ谷再生大学に期待することがあればお聞かせください。

ゆかりさんや村重さんから伺ったことや、ホームページをときどきのぞいて知るかぎりなのですが、帽ヶ谷再生大学の活動には「ちゅら」の立ち上げに関わった大人たちの姿が重なるように感じています。

大変なこと、難儀なことを、体を動かして、アイデア（それこそ“じんぶん”！）で楽しくやってしまうところなど、特にそう思います。被災地での子ども公園づくりやTシャツ再生大作戦、復興支援の音楽イベントなどなど、愛がたっぷり込められた活動ばかり。そして機動力がすばらしいです。

社会をつくるのは個で、その個の熱い想いや、温かい心や、夢が集まって、つながって、広がって、社会を少しずつ幸せに変えていくことを実践している団体だと思います。

沖縄・やんばるから応援しています！

奥石正さん
山梨県出身

「『再生』とはそういったものではないか」

「沖縄」をテーマに問題提起する映画監督としてご活躍される奥石さん。（じんぶん学校）の創設者として、現在の沖縄と日本、帽ヶ谷再生大学の在り方にも触れていただきました。

——「じんぶん学校」の開校はいつでしょうか？

「じんぶん学校」としては、1998年からの普天間米軍基地辺野古移設を反対する名護市民運動と共に立ち上げられた。名護市東海岸に住む7人の住民による設立でした。最終的には、私と現「エコネット・美」の社長である具志堅勇の2人ですね。

現在の「エコネット・美」による「じんぶん学校」の前史には、1987年に私が立ち上げた夏休みを利用した「子どもじんぶん学校」でした。夏休み中に、9泊10日のサバイバル型の「子どもじんぶん学校」（参加者10～20人）を5年ほど続けた。

だが、資金的な面で挫折。水道もなく、川から水を運び、食料は海からのものが主で、施設の規模も今のものの5分の1ほどであった。私にとっての「じんぶん学校」の原型である。

——その魅力はなんだったのでしょうか？

沖縄・山原東海岸の大自然のもつ底知れぬ魅力。それは、海・山・川（滝）のどこそこにある、まだまだその奥ゆきの広さ

は残り続け、今もその魅力は深まり続けている。自然は生き続けていて、これで終わりということはない。

——その際、嬉しかった想いがあればお聞かせください。

「じんぶん学校」に深く関われば関わるほど、人間の小ささ、小ざかしさに気づかざるを得ない。それがなんといってもうれしい。それは同時に現代社会の小ささをあますことなく照らし出してくれる。いったい、何をしているのだ、という優しい問いかけを何度も聞いたことか。

うれしさはもう一つある。森の道づくりである。

森の道は、作る人としてそこを歩く人がいないことには、道にならない。まず自分が歩く。何度も何度も歩く。歩いて初めて見えてくるものがあり、それに気づいて少しずつ直していく。大雨、台風でもよいところを覚えてもらい、また直していく。

おそるべし自然の力。そして樹々の根の力。小さな植物の

果たす役割。意外な盲点。それに教えられてまた直す。その修正力がなくては、森の道はできない。

その意味でも「じんぶん学校」の森の道は、今もその修正の過程にあり、永遠にそれは続く。それがうれしい。1人の人の2つの足が、森の道を踏み固め確かなものしてくれる。それほどうれしいことはない。

——帽ヶ谷再生大学を知ったきっかけを教えてください。

ゆかりさんを通して、そしてゆかりさんが与えてくれた情報を通して、「へーこんなグループがあったのか」と驚いた。

——ゆかりが「じんぶん学校」に連れてきた人たちで、印象に残っている方はいましたか？

どの人も印象に残っている。

——「じんぶん学校」を通してうれしかった、伝えたい経験がありましたら教えてください。

伝えたいことはただひとつ。独りで行動していつも「誰でも最初は初心者」と自分を励ますこと。70歳の私が、今も呟いている言葉です。その呟きが必ずく出会いへと結びつき、自分が思ってもみなかった世界が広がっていく。

頭で考えたり、スマホをいじりまわしているだけでは拓けない世界に自分が立ちあえる瞬間。

そしていつも気づくのは、「まだまだ初心者」というあの実感！ です。

——「じんぶん学校」を通して、辛かった経験がありましたら教えてください。

辛かった、という経験はありません。たった独りの作業のあの喜び。風の音。鳥たちのさえずり。滝の滴の白さ。樹々の間から見える海。うんざりする植物の成長。石垣をけちらすイノシシ。雨の森。忘れずにやってくる草花の色、色、色。海面を渡る雲。アサギマダラ（蝶）の軍舞。雨の羽音のシリケンイモリの眼。森はキャンパスで、そのキャンパスに音楽がのっかってくる。辛かったことは、泡のごとく消えていく。

——今後、帽ヶ谷再生大学に期待することがあれば、お聞かせください。

弱者、若者への視線と、それに対する行動・実践は共感できます。

ただ、もっともっと「敗北力」というもののもつ可能性を信じてほしい。「勝つ力」は、あやういし、危ないし、怪しい。

「敗北力」は、昨年亡くなった哲学者・鶴見駿輔さんの遺稿集のタイトル。私は、それに共感する。「敗北」を「力」として引き寄せることなしに、行動・実践の真の姿はないように思えてならない。

成功にむかって進もうとは思わない。「たぶん負けるだろう、しかし、」と、その先をたどりたい。「再生」とはそういったものではないか。

——混沌とする沖縄、そして日本ですが、何か想うことがあればお聞きたいです。

日本は、混沌にも達していない実には中途半端な国。北半球のもつ宿命なのでしょうか。たったひとりの反乱が実によく似合う国です。チロルとテロル、そんな唄をうたって、たった独りの反乱を、横っちょを向いて続けていきます。

詩「アホクサ」

「じんぶん学校」の森の道でステキなのが、夕方と夜のわずか30分ほどの間（スキマ）です。

どちらともつかない時のゆるやかな動き。

地球の自転がドキドキする胸に届く。

無言の音楽がどこそこ生まれてくる。

淋しいかって？ そんなことはない。

別れが惜しいかって？ そんなこともない。

アホくさいかって？ そうかもしれない。

死にたいかって？ たぶんそうだろう。

帰るかって？ どこに。

森の地面の中に。

イソイソと岩のスキマに身を入れるイモリになって、ちょっと休むか。

東京のビルに黒いミノムシがたれさがってくる。

道をぐんと下げ、脚をだらんと垂らし、体液をしたたらせた黒いミノムシが。

名護東海岸の夜のしじま。朽ち果てるには、もっともっと漆黒の暗さが。

真っ暗な中に黒衣のたった独りの反乱。



KUMAMOTO CAMPUS

2016年4月14、16日に発生した熊本地震では直後から熊本に入りました。熊本市内で「幡ヶ谷再生大学 熊本キャンパス」が開催され、南阿蘇を中心に現地での活動を継続しています。

きっかけは災害ですが、ご縁をいただいた九州でも心を寄せ、人と場をつないでいきたいと思っておりますので、多くの方のご参加をお待ちしています。



編集後記

今年2016年は「吾輩は猫である」などで知られる文豪・夏目漱石氏の没後100年にあたる。昨年、「読売中高生新聞」が全国の学校の先生に「中学生、高校生に薦める本」のアンケートをおこなったところ『こころ』が第1位になったようだ。

この文豪の書いた作品を読んだことはなくとも、1984年から2004年までの20年間、1000円札の人物にもなった明治、大正時代を生きた偉人を知らない者はいないだろう。

アンケートがおこなわれた2015年、関東・東北地方に豪雨災害が起こった。鬼怒川が決壊し、濁流に取り残された住民がヘリコプターで救助される映像を覚えている方は少なくないはずだ。

被害に遭った常総市にあるTシャツ工場の廃棄の山を見たとき、絶句した者は多い。筆者も例外なくその1人だが、その山を見て、闘志をみなぎらせた者が多かったことに驚いた。

その闘志は、ときに空回りしながらも訪れたボランティアたちを扇動し、Tシャツ工場での「自主練」の礎を築いた。

今年1月、礎を築いた1人と話をしたとき「最初にもっと酷かったんですよ」と聞かされた。それでも十分に酷い光景だったが、それ以上の光景を想像できなかった。

本誌の作成にあたり、たくさんの写真素材を生徒からいただき、その言葉に納得させられた。百聞は一見に如かず、ではないが、目の当たりにして初めて分かるものがあり、現地に行っているものは、写真の比ではない。

廃棄されるはずのTシャツが、発掘→洗濯→干す→とりこむ→仕分け→タグ切り→プリントといった地道な作業を経て「リユースTシャツ」として世に出た。「Tシャツ再生大作戦」によって、さまざまな形で使われ、全国各地の人々が手にしている。

本誌の中に「リユースTシャツを見たときに災害があったことを思い出してもらえれば本望…」、「風化させないでほしい」と続く文面がある。この想いを目にしたとき、作業に携わったすべての方々が報われるのではないか？と勝手に想像を膨らませた。

行動や活動のすべてが報われるわけではないし、その答えは何十年も先になる場合もある。だが、続けていなければ、たど

り着けない境地は必ずある。「自主練」はその最たる例だろう。

小瀬浜みかん公園、いわき生木葉ファーム、常総Tシャツ工場での「自主練」は現在も続き、Twitterなどで活動を見ることができる。立ち上げた方々、続けている方々の苦勞なくして、決して語ることができないことを記しておきたい。

誰かに力を受けた者は、誰かの力になりたいくなるものだし、一人一人が「やる側」に立たない限り、社会が良くなっていく方法が存在しないように「自主練」が現在も継続して活動がおこなわれているのは、受け手側だった人間が、「やる側」に変わったからではないだろうか。

幡ヶ谷再生大学関連の活動を知るにはweb、SNS、または本誌がほとんどだ。本誌作成中に掲載された生徒から「(冊子は)自分のような参加者が活動でき、参加していないときのことを知ることができ、他の参加者の思いを知ることができると思います。ましてや、それが冊子として一つの形にしていたくれるのは本当に嬉しいです」とメールをいただいた。

SNSの普及により誰でも自己主張が可能となっており、否応なく「個」の時代が台頭している昨今で、何とも心温まるものだったし、掲載された生徒のみならず励ましをいただいた。失礼な質問にも真摯に答えていただき、この場を借りて御礼を申し上げます。

携帯電話などの普及により下を見て歩くことが多くなった現代人だが、上を向いて歩ける出来事は誰にでも存在する。活動を通じ、友人になり、その後かけがえのない仲間となり、プライベートでも行動を共にしているお話も多く聞きました。

閉塞感のない帰属意識が芽生え、そのことを象徴するように「水害をマイナスに捉えることなく、プラスに」と聞こえてくるのは、上を向いて歩いている確かな証拠だろう。

1世紀以上を経た現在でも夏目漱石氏の『こころ』は、人生の道しるべとして現代に色濃く残っている。自分自身の歩む道を決めるのは、誰でも自分自身の心であり、道しるべとなるのは自分自身が好きになったものや、仲間の存在ではないだろうか。

幡ヶ谷再生大学がこれから100年続く保証はないが、傷ついた人を思いやる心さえあれば、その優しさは人から人へと伝播し、受け継がれていくものではないだろうか。

ご支援ご協力について

私達、幡ヶ谷再生大学復興再生部は音楽やスポーツを通じて繋がった仲間達、そして皆様のご協力のもと、長期的かつ継続的な復興支援を行なっていくことができます。現時点、当団体は専任のスタッフを雇用しておらずボランティアによる、少人数での運営となっております。そのなかであくまでも現地の連携を直接的にすること、個人、団体、自治体に関わらず、私達の力を必要とする場所へ確実な復興支援を目指していきます。随時、人手募集や物資の募集も行います。また皆さまよりご支援頂いた物資や支援金は当団体が責任を持って復興のために使わせて頂きます。